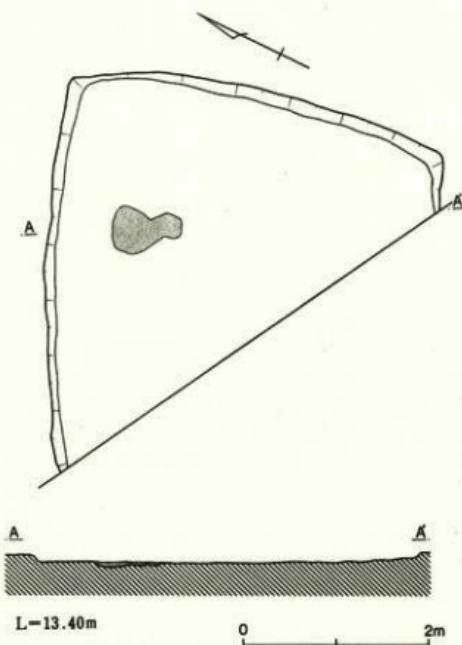


第172図 1~4号炉穴・2号土坑

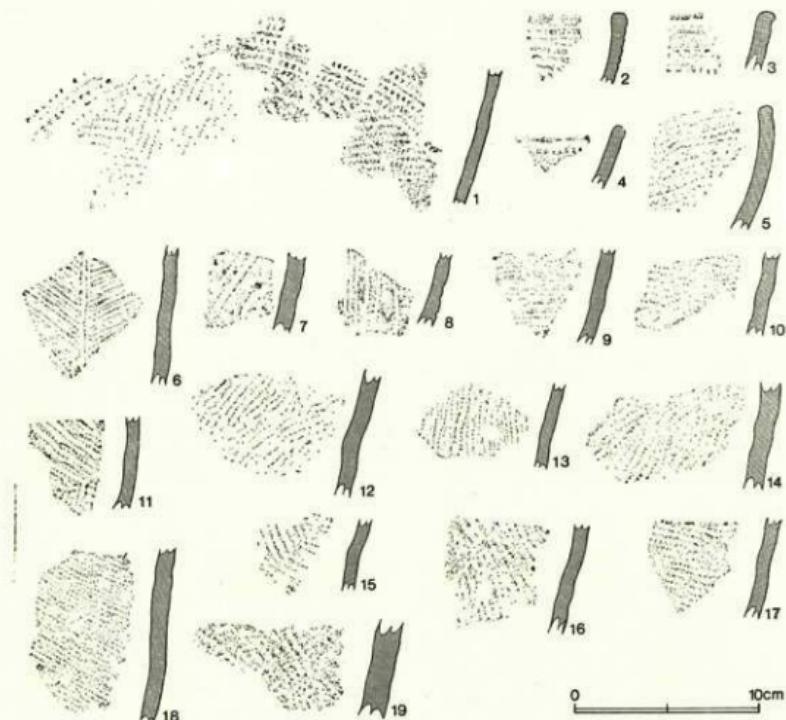


第 173 図 1号住居址

り、沈線もゆるい波状を呈している。6はいわゆる肋骨文を施している。半截状の竹管により2本1組の沈線により文様を描いている。7はやはり半截状の竹管により文様を描いており、渦巻くように施文されている。8は沈線により格子目状に文様が描かれている。縦位には密に、横位には間隔をあけて施される。9~19は縄文の施された胴部の破片である。縄文は附加条縄文と単節の斜縄文が多い。1, R-L_s-r_sである⁽¹⁾。10, 16, 17, 19はR{L}であり、10はL{R}であろう。12はL{r}である。15はL-R_s-l_sとR-L_s-r_sとで羽状縄文を施文している。11, 17, 18はR{L}+Lの附加条縄文と思われる。

2号住居址（第175図）

27-I, 28-I, 27-J, 28-Jの各グリッドにおいて検出された。4号住居址の構築により南東部分を壊されており、全体の形状は明らかではなかった。直径5mないし4.20mのほぼ円形を呈するものと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、15cm前後である。炉址は検出されなかつた。床面は検出に困難を極めるほど軟弱であり、ハードロームがソフト化した層中に築かれていた。柱穴

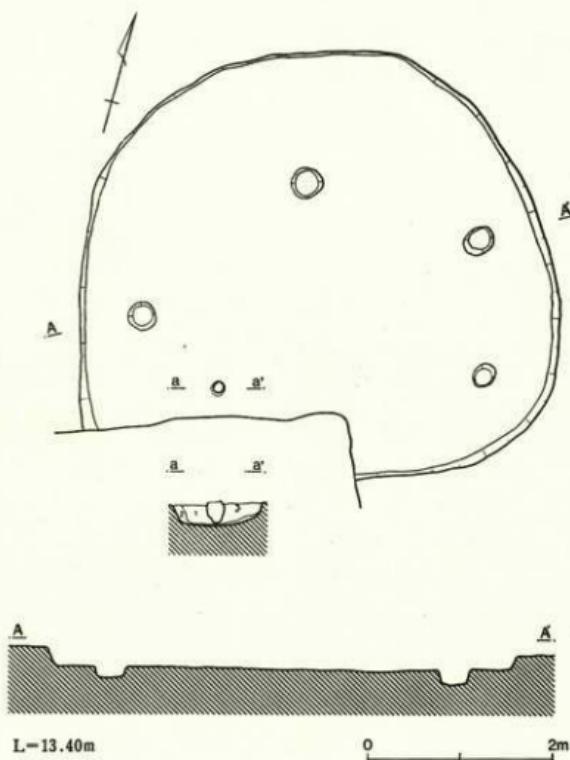


第 174 図 1号住居址出土遺物

は 4 本検出された。深さは 20 cm 前後であり、主柱穴としては浅い感じがしないでもない。覆土とは見分けがつきにくいほど似かよっていた。遺物は縄文後期初頭の土器が割合豊富に出土し、5 個体復元された。破片も出土した。又南西の床面下には埋甕が検出された。当住居址の時期は、出土土器により、後期初頭称名寺式期であろう。

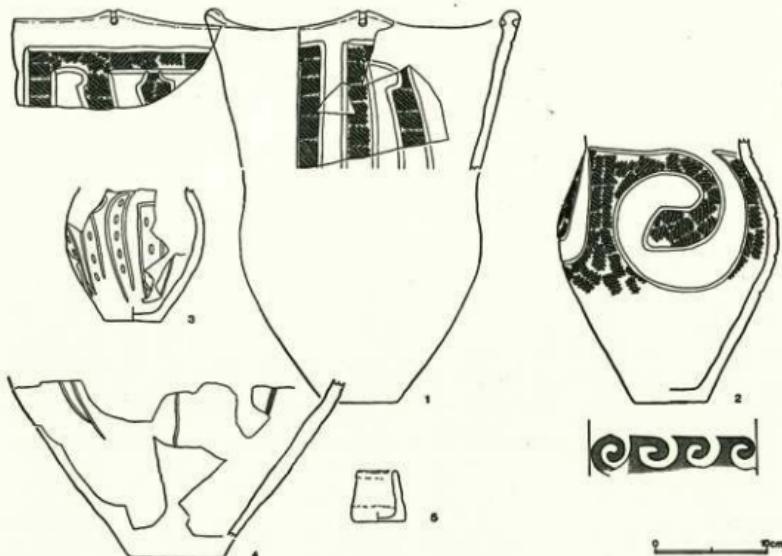
2 号住居址出土土器（第 176 図 1～5, 第 177 図 1～23, 第 178 図 24～34）

第 176 図 1, 覆土中からの出土である。破片であり全体を知ることは困難であるが、沈線間に L { R 縄文が充填されている。色調は明褐色を呈する。胎土には細かい砂粒が含まれる。焼成は良好である。2 は埋甕として使用されている。口縁部が欠損しているが他の部分はほぼ完形である。文様は模式図のとおり規則的ではない。頸部で胴上半と下半の文様が分離している。施文順位は沈線 → L { R 縄文の充填 → はみ出し部分の磨消し → 胴部下半のヘラ削りの順に施文されている。色調



第175図 2号住居址

は明褐色～灰褐色を呈している。胎土はやや大きめの礫も少し含まれるが概して小さい。焼成は良好で堅緻である。3、藤手状の沈線と逆「U」字状の沈線間に列点を配するものである。おそらく4回の繰り返しになるであろう。色調、表面は黒褐色～黄褐色を呈しており部分的に煤で黒変した場所が見うけられる。内側は黄褐色を呈する。下半部は炭化物？の影響で黒色化している。胎土には細砂粒を含む。焼成は極めて良好である。4、底部の破片である。細くだらしない沈線による懸垂文が施されている。色調は明褐色～灰褐色である。胎土には細砂粒を多く含む。特に白色の砂粒が目につく。焼成は良好である。5、手捏ねの小形土器であり、口径3.6cm、器高4.6cmである。色調内外ともに赤褐色であるが一部は暗褐色を呈する。内面にはところにより黒褐色の部分が見うけられる。

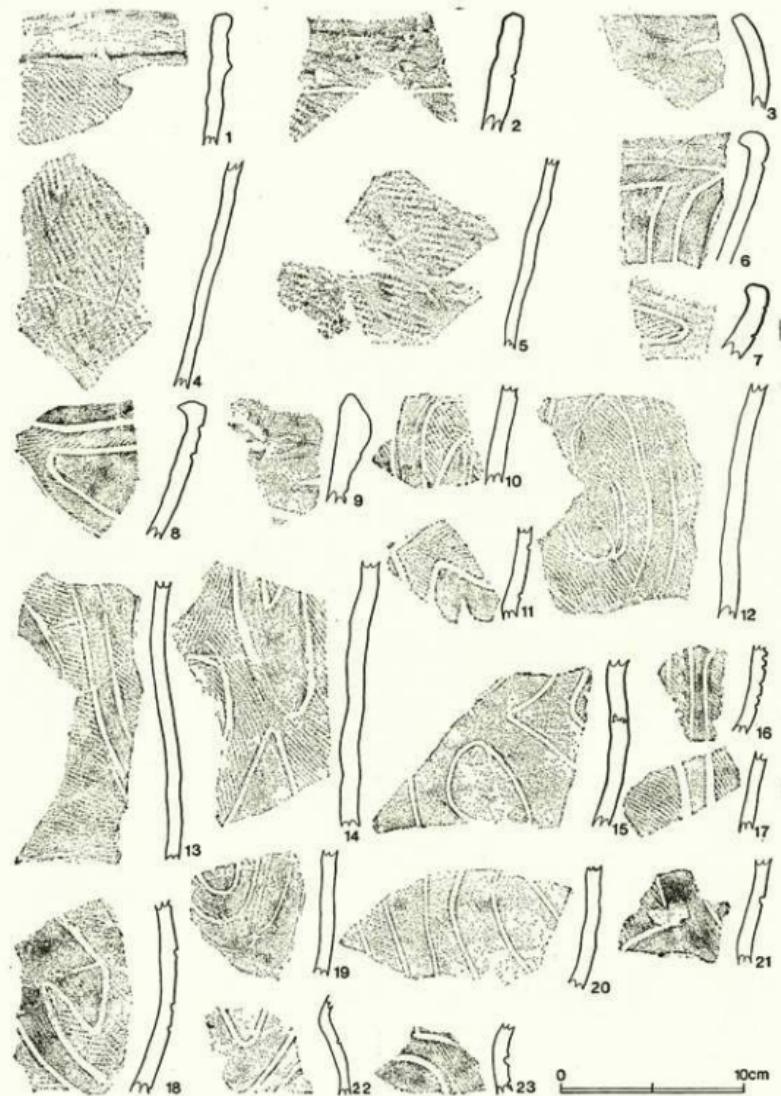


第 176 図 2 住居址出土遺物 (1)

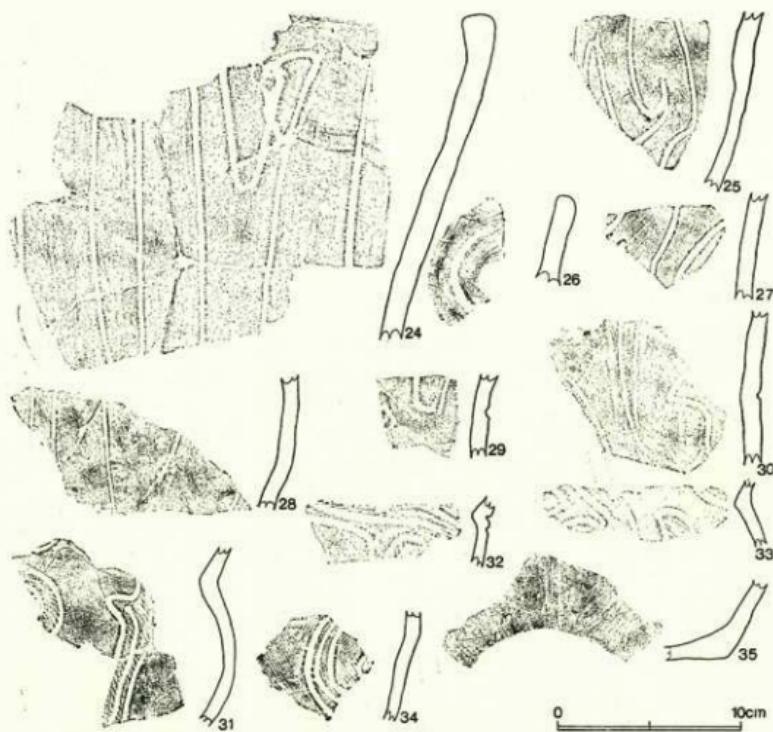
第 177 図 1, 3 は口絶部下を無文にし、微隆起線文を一巡させ、以下 $R\{L$ の斜行縄文を施す。2 は沈線を描き、 $R\{L$ 縄文を施している。4, 5 は、1～3 のような土器の胴部であろう。6～23 は沈線内に縄文を充填するものである。6, 7, 8 は口縁部内側に稜を持つものであり、全て沈線を描いてから $R\{R$ 縄文を施している。縄文は一般的に細かい。色調は暗黄褐色を呈し、胎土は緻密、焼成は極めて良好である。9 は口縁部が肥厚している小波状を呈する口縁部の破片である。突起部には隆帶が貼付されている。10～23 は胴部の破片であり、全体の文様は不明である。当型式の文様は複雑であり、このような小破片で文様を推定することは難しい。沈線により渦巻き、鉤形・ハート形、スペード形のような様々な文様を沈線で描きその内部に縄文を施すものである。23 は $R\{L$ 縄文、他の 10～22 には $L\{R$ 縄文が充填されている。24～30 は沈線のみで内部には何ら施文しない土器である。24 は縦長のハート形を描いている。25, 27, 30 は鉤形をなしていない。28, 29 は直線的に垂下する懸垂文である。31～33 は深鉢形ではない特殊な器形を成す土器である。狭い沈線間に $L\{R$ 縄文を充填する。35 は底部の無文土器の破片である。

2 号住居址出土石器 (第 179 図)

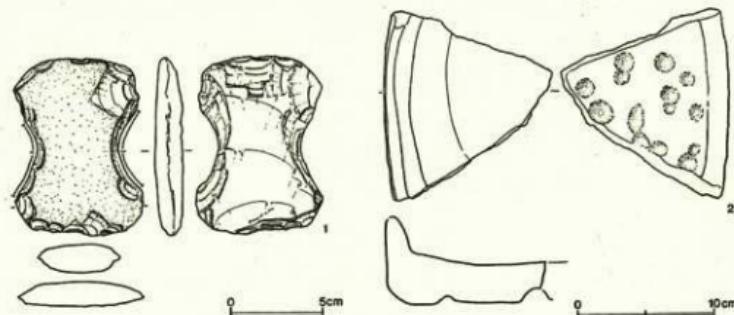
1. 打製石斧 (第 179 図 1) 片面に大きく自然面を残した剝片利用の打製石斧である。両側に抉りを持ち左右対称形を呈す、抉り部の磨滅は激しく、まるまっている。主要剥離を大きく残し、



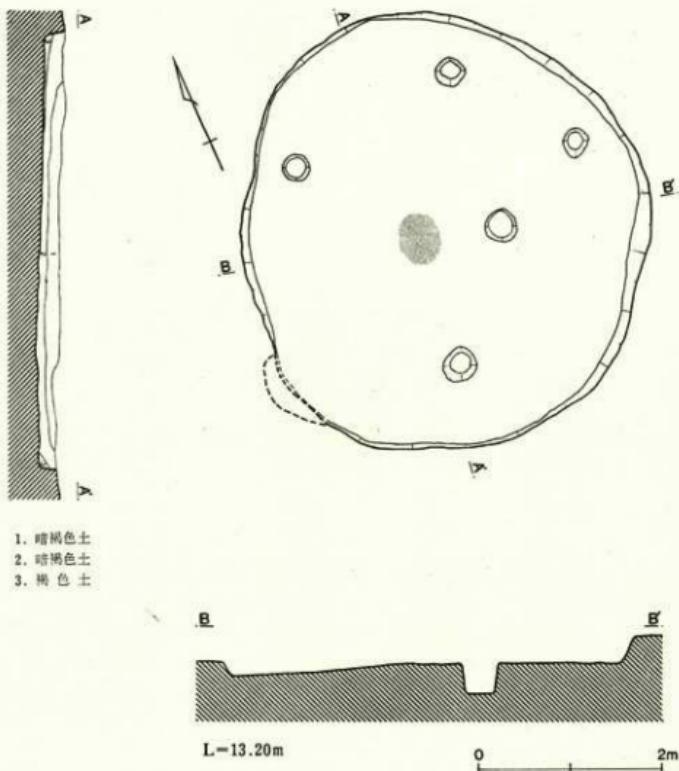
第177図 2号住居址出土遺物(2)



第178圖 2號住居址出土遺物(3)



第179圖 2號住居址出土遺物(4)



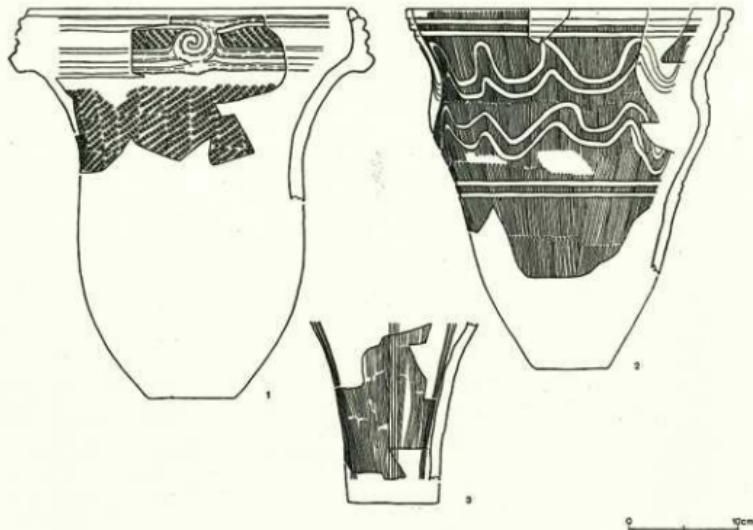
第 180 図 3 号住居址

周辺加工によって作り出しているため厚さは一定している。

2. 石皿（第 179 図 2）破損しており、裏に多くの窪みを持つ。

3 号住居址（第 180 図）

36-H, 37-H のグリッドを中心に検出された。当発掘区の最南端に位置し、長径 4.7 m、短径 4.2 m のほぼ円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面より浅いところで 15~20 cm、深いところでは約 30 cm ほどである。炉址はほぼ中央に位置し、長径 0.60 m、短径 0.45 m の楕円形の地床炉である。炉は床を若干掘り込んで築かれている。炉床はあまり使用されなかつたためか、あまり焼けておらず、固くもなかった。床面は炉周辺は若干堅かったが、他は一様に軟弱であ



第181図 3号住居址出土遺物(1)

った。柱穴は、5本検出された。覆土はほぼ3層に分層され、暗褐色土、黄褐色土の順に堆積し、自然堆積の様相を呈していた。遺物は全て覆土中より出土した。図示したとおり、3個体が復元された。他は破片が出土した。

3号住居址出土土器（第181図1～3、第182図1～13）

第181図1、口縁部は渦巻状の隆帯により文様が描出されてゐる。施文順位は隆帯を貼付してからR{L{R}R}の複節繩文を横位に施文している。胴部はR{L{R}R}の繩文を縱位に全面施文してL{R}Rの地文を用いている。色調は明褐色～明赤褐色を呈する。胎土は細かい砂粒がみられる。焼成は良好。2、文様は口縁部に2条の沈線を横位に施こし、2本単位の弧線を2段にわたり2本単位の沈線により施す。地文は5本単位の櫛歯を使用しているようである。櫛歯条線→沈線の順で施文している。色調は明赤褐色。胎土、極めて細かい砂粒を含む。焼成、極めて良好である。3、5本1組の櫛歯条線を地文としてから、3本単位の沈線による鱗垂文が器面全体に5対配されている。色調は全体的に暗褐色を呈する。胎土、細砂粒を含む。焼成は良好である。

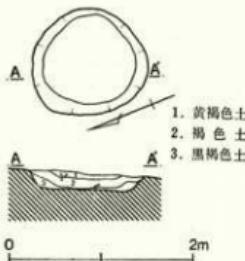
第182図1～5は口縁部の破片である。1、キャリバー状の器形を呈する深鉢形土器である。口縁部の文様は上から口縁直下に一本の沈線を描き、順に沈線で梢円形の区画文を描き、内部に縦



第182図 3号住居址出土遺物（2）

位の沈線を施こし、さらに○字状の沈線をその下方に描いている。口縁部と胴部文様帶の間は無文化し、胴部には2本沈線を横走させ、継位に縦垂文を施している。胴部の施文順位は縄文→沈線の順である。縄文はR{L}である。2は梢円区画内が1と異なり、L{R}縄文を施文している。3は渦巻文が梢円区画文と交互に施文されるものであろう。縄文はR{L}である。4、器形はラップ状に開く、口唇部上は平らになる。口縁部は無文化し、くびれ部に隆带を貼付し、交互に刺突文を施している。5、2と同様に隆带・縄文→沈線の順に施されている。6、1と同様の文様である。

ると思われる。7～13は胴部の破片である。7、1と同一個体と思われる。8、12はR{^L_L}縄文→隆帯の貼付→隆帯の両側の沈線の順である。9、横位に隆帯を施したのち両側の沈線→縄文→内部の沈線の順に施文している。縄文はR{^L_L}である。10、隆帯の貼付→沈線→L{^R_R}縄文の順である。横位に貼付された隆帯上には刻みが施されている。11はL{^r_r}縄文を施したのち、2本1組の沈線が弧状を描きながら施文されている。



第183図 1号土坑

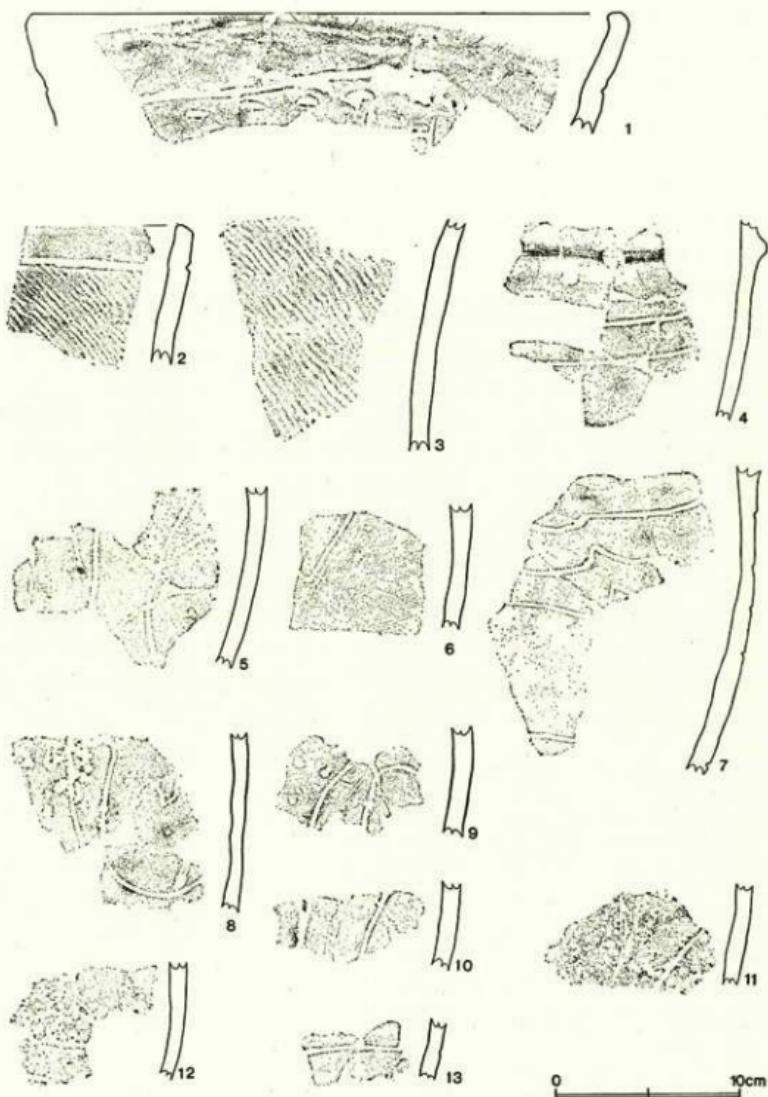
c. 土坑

1号土坑（第183図）

直径120cmのほぼ円形を呈する。確認面からの高さは約20cmである。壁は斜めに立ち上がり、床面はほぼ水平である。覆土は3層に分層され黄褐色土、褐色土、黒褐色土の順に堆積していた。覆土中より土器片が割合多量に出土した。出土土器は称名寺式のうち終末の時期に位置するものであらう。

1号土坑出土土器（第184図1～13）

1、口縁部の破片である。沈線により文様が描き出される。沈線内には刺突文が施される。口縁部の内部は低い稜を持つ。2・3は縄文の施された土器である。L{^R_R}縄文が施文され、2は口縁部であり沈線を描いてから縄文を施している。4～7は同一の破片と思われる。口縁下に隆帯を施し、胴部には平行沈線のみにより文様が描かれるものである。色調は他の土器よりも赤味を帶びた土器である。8～13は表面の剥落した土器が多い。9、12は沈線内に刺突文を有するが他のものは平行沈線のみにより文様が描出される。8は「J」字状の文様が施される。また図示しなかつたが無文土器は出土量の約半数をしめている。



第184図 1号土坑出土土器

d. グリッド出土土器

第1群土器（第185図5～8）

縄文早期に属する土器をもって本群とした。

1, 平行沈線により文様が描かれるものである。沈線を描く前に籠状工具により、丁寧に研磨される。縄文早期の田戸下層式である。黄褐色を呈し、焼成は極めて良好である。2～5は早期の条痕文系の土器である。2, 細隆起線により幾何学的な文様を描くものである。裏面は条痕が斜走している。3は口唇部に斜めに刻みを入れる。表裏ともに条痕が横走している。4は表に条痕が施され、裏面には痕跡をとどめる。補修孔と思われる穴が穿たれている。5は表裏ともにはっきりと条痕が施文される。6は表裏とも割落が激しいが擦痕状の文様がかすかに観察できる。

第2群土器（第185図9, 10）

縄文前期黒浜式以前の土器を本群とした。

9, 口唇部は肥厚し折り返し口縁風になる。縄文は0段多条（3条）のR{L, L{Rを交互に施文した羽状縄文である。花積下層式であろう。10もL{RとR{Lの細かい縄文を使用した羽状縄文である。花積下層式か開山式であろう。2つとも繊維を多量に含んでいる。

第3群土器（第186・187図）

縄文前期黒浜式土器に含まれるものと本群とした。全ての土器に繊維が含まれている。沈線の施文された土器は焼成が良く、表面もよく研磨されている。

第1類（11～13）

11～13は爪形文の施された土器である。半截竹管状施文具により爪形文を施し、文様帯を形成するものである。11は無文部に一条の爪形文を施すが他の部分には文様は施されない。12は3条の爪形文を施し胴部に縄文を施している。13は波状口縁をなし、爪形文を三段施文する。

第2類（14～18）

口縁部文様に平行沈線を施し、胴部に縄文を施しているものである。14, 15は口縁部分は欠損しているが半截竹管状の工具により何条かの沈線を施し、胴部には縄文が施文される。16は口縁部である。

第3類（19～25）

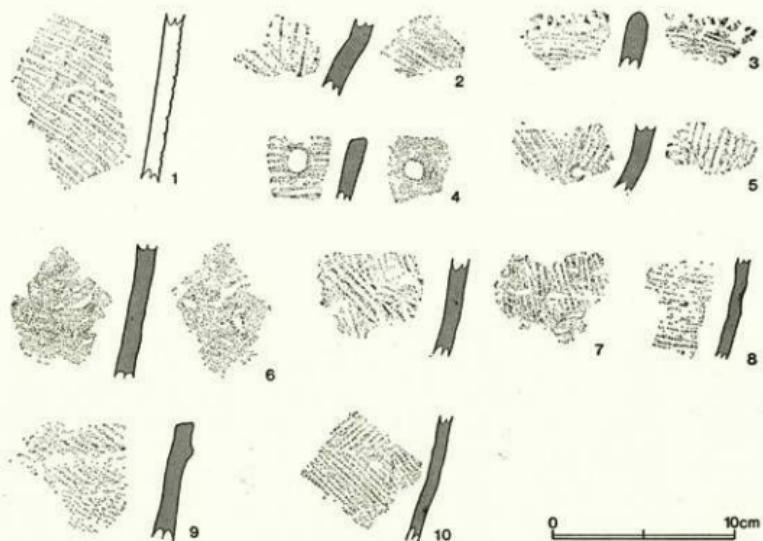
肋骨文を施文した土器群である。半截竹管状工具により文様を構成するものと沈線によるもの（23）とがある。21は地文にR{L縄文を施文している。

第4類（26～39）

沈線により文様を描くものである。沈線は規則性もなくだらしなく施文されるものが多い。26, 28, 29, 30は半截竹管により沈線が描かれる。27, 31, 32, 33は格子目状の文様を施すが極めて複雑な施文の仕方である。32, 33は円形状の刺突があるわけではなく丸棒状のものと思われる。35～39は割合密に沈線が施される。35は地文にR{L縄文が施文される。38は底部である。

第5類（40～44）

コンバス文の施文された土器である。口縁部や胴部に施文されており、43のように底部にも施されている。縄文は40, R{L+L, 41, R{L+R, 44, L{R+Lであると思われる。



第185図 グリッド出土土器(1)

第6類 (45~77)

縄文の施文された土器である。

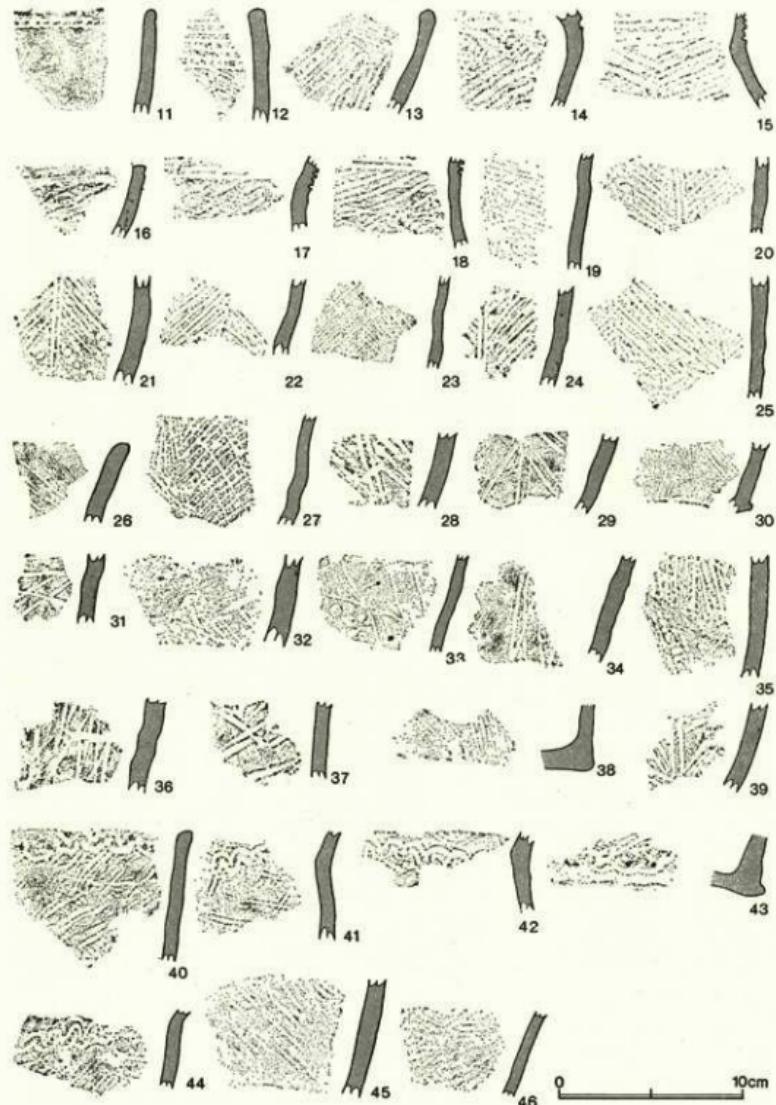
付加条縄文が多いが、器面が荒れている場合も多く観察できない場合と理解しにくい点もあり、理解したのみを書くこととした。45, R $\left\{ \frac{L}{L} + 1 \right\}$, 47・49は同一破片と思われる。L $\left\{ \frac{r}{r} \right\}$ であろう。48は L $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$, 50, R $\left\{ \frac{L}{L} + L \right\}$, 51, L $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ か, 53, R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ と思われる。54, R $\left\{ \frac{L}{L} \right\}$ +R, 55, L $\left\{ \frac{r}{r} \right\}$, 66, L $\left\{ \frac{R}{R} + L \right\}$, 69, L $\left\{ \frac{R}{R} + r \right\}$, 70, R $\left\{ \frac{L}{L} + L \right\}$, 71, R $\left\{ \frac{L}{L} + L \right\}$, 73~76, R $\left\{ \frac{1}{1} \right\} + 1$ であると思われる。52, 69のように結束縄文もあり、前期織維土器の縄文の複雑さを物語っている。当黒浜期の縄文の研究はさらに深化されなければならないだろうし、土器相互間の研究が進展するであろう。

第4群土器(第188図)

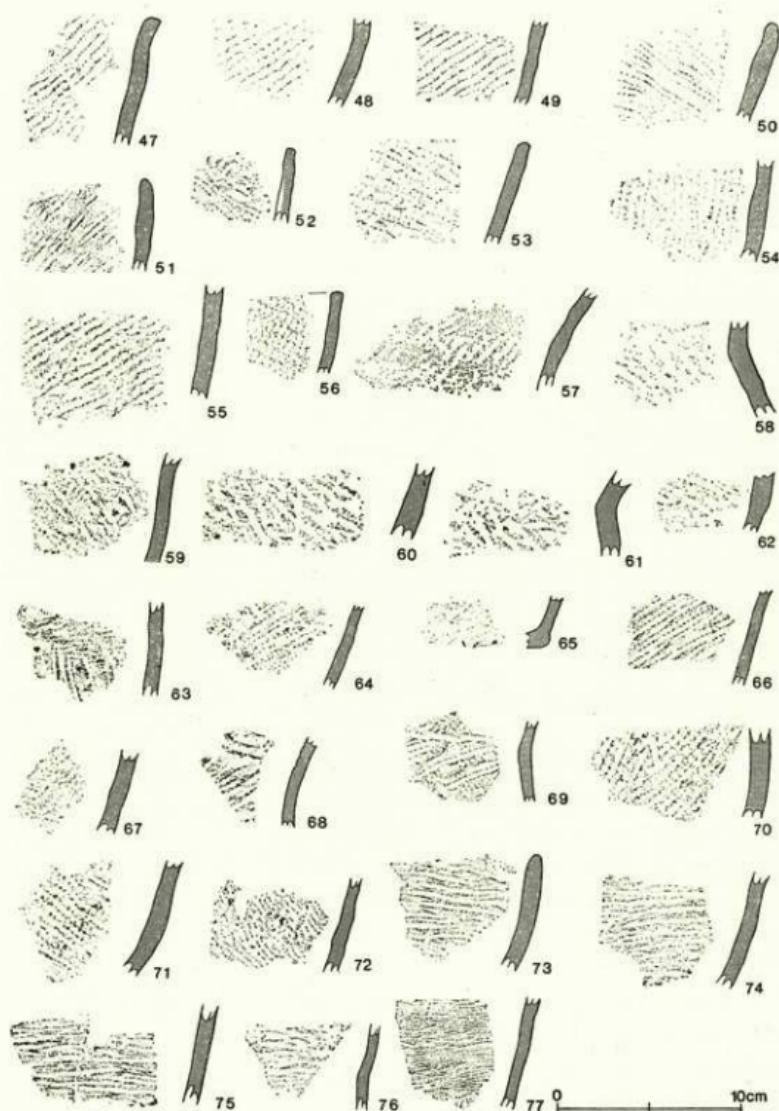
諸畿a式に含まれるのである。

第1類 (78~92, 94)

平行沈線内に爪形文を施すのであり、爪形文の施文部は地文が無くよく研磨されている。78~86は平行沈線内に爪形文を施している。沈線を2本施すものが多い。胴部には単節縄文を施文するのが普通である。79, 81は縦形に羽状縄文を施文している。87, 88は胴部を欠損しており、88は3段に爪形文が施される。89~92は爪形文が半弧状、波状に文様が施文されるものである。92は



第186図 グリッド出土土器 (2)



第187図 グリット出土土器(3)

口縁下にのみ爪形文を施し、弧状に描かれた部分には爪形文が描かれない。94 は沈線を引かない
爪形文を 2 段に施し、胴部には $L\{R$ 繩文が施されている。

第 2 類 (93, 96~99)

半截竹管状の施文具により文様を描くものである。木の葉、渦巻、三角文等の文様がある。93
は木の葉状文が連続的に施文される。95 は何重にも弧状の沈線を描き同心円状の文様を施して
いる。96 は平行に沈線を描き、沈線間に波状の沈線を描いている。97~99 は 2 本単位の竹管を 2 回
描くことにより 4 本の沈線を平行に施し、内部に三角形の文様を描いている。地文には $L\{R$ 繩
文が施文される。かなり乾燥してから施したものであろう。

第 3 類 (100~102)

円形刺突文を持つものを本群とした。地文には斜行繩文を持ち、爪形文を有するものである。
100 は爪形文を横位に施し、円形刺突文を縦位に施文する。刺突文間は沈線により結ばれる。また
斜行する沈線により文様が描きだされる。101 も $L\{R$ 繩文施文後円形刺突を施し、刺突間を沈線
で結ぶ、102 は波状口縁を呈する、口縁にそって 3 条の爪形文を施し、波頂部から円形刺突が密に
施される。繩文は $L\{R$ である。

第 4 類 (103~112)

繩文の施文された一群の土器である。

100, 112 を除き口縁部の破片である。103 は口縁部は外反する。104 は若干内傾気味である。
107, 109, 111 のように口唇部が丸くなるようであり、106 は口唇部が平らになり、内側に稜を
持つようになる。103~106, 112 は $R\{L$ 繩文が施される。107~111 は $L\{R$ 繩文であろう。
107, 109, 110 はきわめて細い繩文が施されている。106~110 のような細い繩文は施文される時、
繩が曲がるためか条が曲がっている (107, 109, 110)。

第 5 群土器 (第189図)

諸磽 b 式に含まれるものを本群とした。

第 1 類 (113~117, 119, 120, 123, 124)

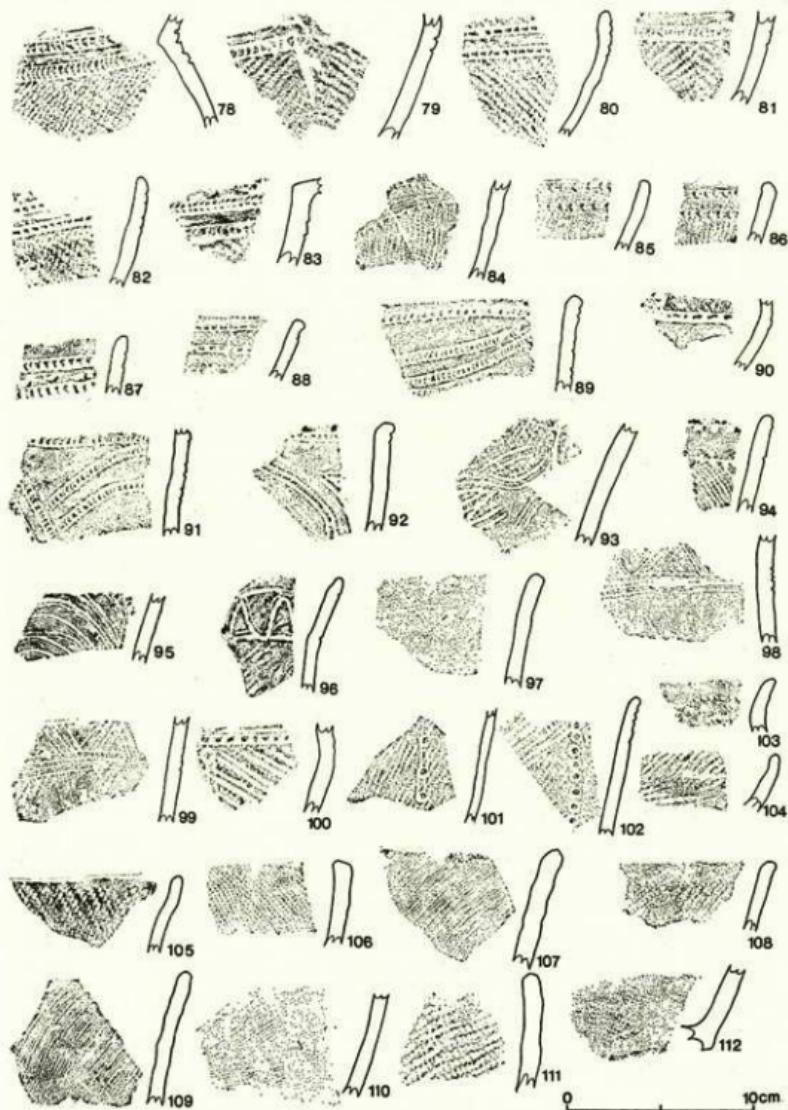
平行沈線内に爪形文を施すものであり、幾何学的な文様や梢円形を描いている。113, 117 は爪形
文を密に施し、浮線文風の隆起帯ができる。114, 115, 117 は平行沈線を横位に描き、斜位に
沈線を施し、内部に爪形文を施すものである。無文部は良く研磨されている。119, 120, 123, 124
は平行沈線を施し、内側に刻みや爪形文を施すものである。119 は隆帶で梢円文を描き、隆帶上に
刻みを入れる。120 は平行沈線内に刻みを施す。123, 124 は平行沈線内には刻みを施し、木ノ葉状
の文様には爪形が施される。

第 2 類 (118, 121, 122, 125)

平行沈線で波状や弧状を描くものである。118 地文に $R\{L$ 繩文を施し、縦位に爪形文を施し、
左右に平行沈線を描き、2 条は全周するようである。121 は平行沈線間に波状の沈線を描く。122
は半弧状を描いている。125 も半弧状の文様を描く。

第 3 類 (126~136)

地文に斜行繩文を持ち、半截竹管状の平行沈線を施文するものである。2 本、又は 3 本の沈線で



第188図 グリッド出土土器(4)

描いている。126～128, 130, 132 は斜行罫文を施文後半截竹管で平行沈線を描く。129, 131, 133～136 は罫文施文後平行沈線を施し、沈線間に弧状や木の葉状の文様を施すものである。

133, 136 は 3 本の沈線により文様が施される。他は 2 本沈線である。

第 4 類 (137, 138)

櫛齒状の条線が施されるものである。137 は $R\{L$ 罫文を地文とし 4 本 1 組の櫛齒条線で横走させてから波状に描く。138 は 5 本の櫛齒条線で波状に文様を描いている。

第 5 類 (139～143)

第 1 ～ 4 類に含まれないものを本類とする。139 は半截竹管の沈線により格子状に文様を描き、内部に円形刺突文を施文している。141, 143 は浮線上に爪形を施す。143 は浮線が渦巻き、隆帶上に刻みを入れる。140, 141 は罫文を施文する。ともに $R\{L$ 罫文であり、結束を有する。

第 6 群土器 (第190図 144～154)

諸磯 c 式に含まれるものである。半截竹管により胴部文様が描かれるものと隆線のものがある。144～149 は口縁部に縱に突起を施している。口唇部には刻みを有している。145 は波状を呈する。横位に沈線を施したのち、胴部に縱位に沈線を描く。胴部文様は直線的に垂下する沈線を閉むように弧状に沈線を描く。180, 181 は縱位に沈線を描き、両側に格子目状の文様を描いている。153 は隆帶を横位に貼付し、渦巻き状の沈線が施文される。154 は渦巻き状の隆帶が施され、隆帶上には爪形文が施される。この類の土器は一般的に黄褐色～黄赤褐色であり、焼成は良好である。

第 7 群土器 (第190図 155～160)

罫文前期後半の東南東系の土器である。

155, 156 は半截竹管状施文具による平行沈線文が施されている。地文原体 $R\{1$ の撚糸文が施文されている。157 は口縁部に縱位に刻目を入れ、胴部に平行沈線を施している。158 は口縁部に細い沈線を密に施し、三角刻文を 2 列単位で横位に施文するものである。159, 160 はサルボウのようなアナダラ属の貝殻の腹縁による刺突文を連続施文したものである。161 は指頭状圧痕を連続的に施文している。

第 8 群土器 (第190図 162～166, 第193図 233)

罫文中期に属し、加曾利 E 式以前の土器を本群とした。

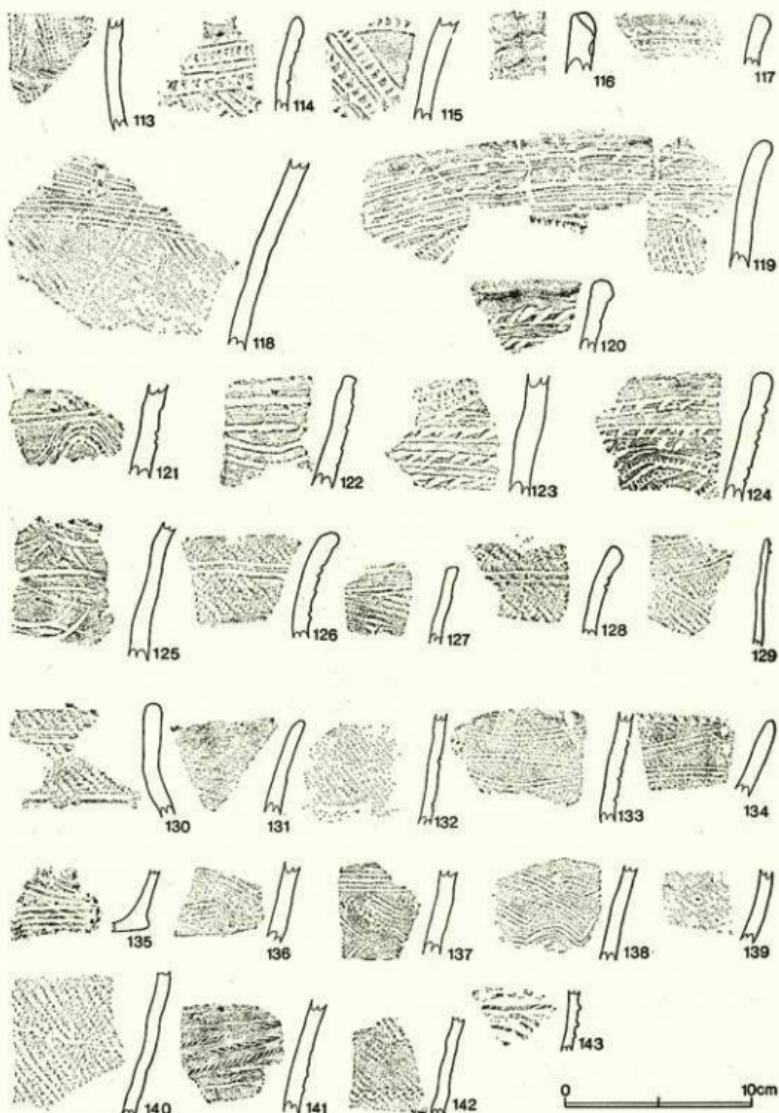
162, 163 は隆帶により梢円区画をつくり、隆帶上には刻み目を持つ。162 は隆帶両側を 2 本の沈線が施文されている。164 は三角形の文様を隆帶で区画し、両側に爪形文、角押文を施している。165, 166 は隆帶に沿って爪形文と沈線を施している。第 193 図 233 は隆帶が渦巻き、両側に沈線が描かれている。

第 9 群土器 (第195図, 第196図, 第197図, 第191図167～186, 第192図187～191)

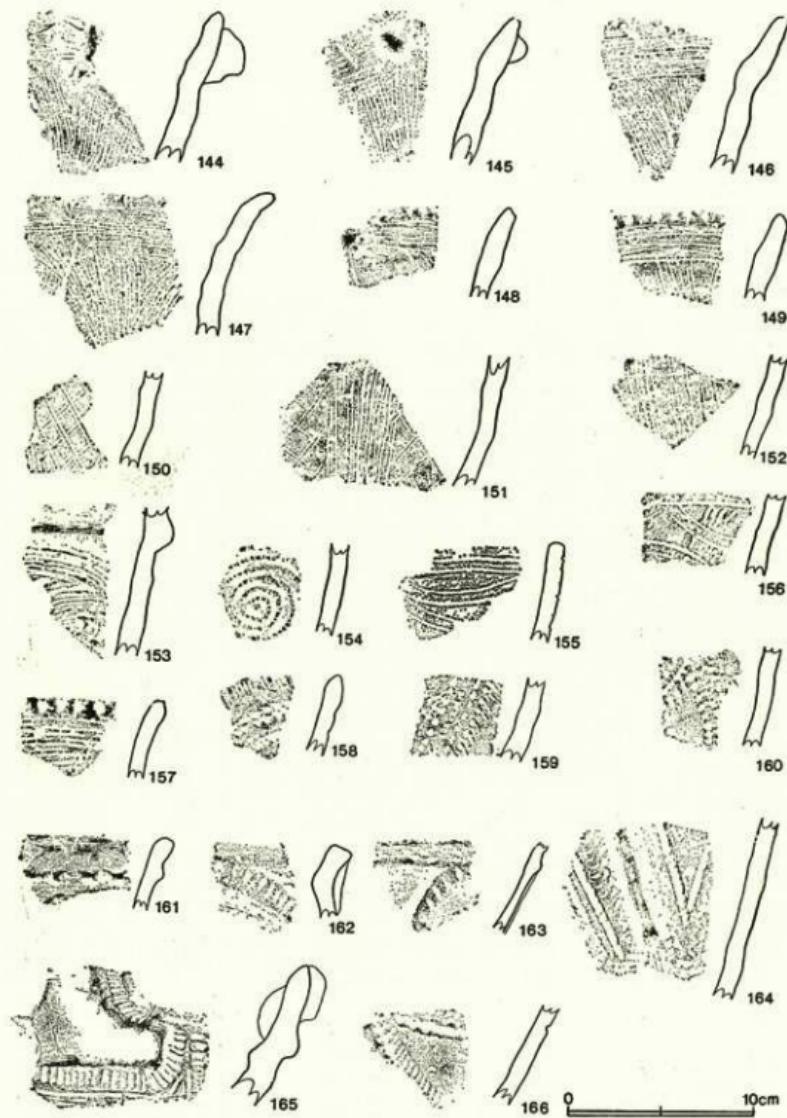
加曾利 E 式に属するものをもって本群とした。比較的新しい時期に属するものが大半である。

第 1 類 (第195図 1)

第195図は胴部の破片である。ほぼ復元した。 $R\{L$ 罫文を器面全体に施文したのち 2 本 1 組の沈線で縣垂文を施文するものである。縣垂文は直線的に垂下するものと、蛇行しながら縣垂するものとが交互に 4 対配されるものと思われる。色調は暗褐色を呈し、胎土にはやや大きめの小石と



第189図 グリッド出土土器(5)



第190図 グリッド出土土器 (6)

細砂粒が含まれる。

第2類 (第196図2・第197図, 第191図 167・168)

隆帯を貼付し両側に沈線を描くものである。

第196図2は隆帯で渦巻文と梢円区画文を描き文様帶を構成するものである。隆帯→R{L 繩文→隆帯の両側の沈線の順になると思われる。胴部には R{L 繩文を全面施文したのち沈線による縣垂文を施すものである。第197図は繩文を施したのち渦巻文を付すものである。渦巻文は上下の隆帯により区画されている。167は口縁部であり隆帯により区画文を構成している。施文順序は繩文→隆帯→沈線であり、繩文原体は L{R である。168は口縁部下半～胴部にかけての破片である。横位に隆帯を付してから縦位に縣垂文を施している。繩文は L{R である。

第3類 (第191図 170～174・186)

磨消しの縣垂文を施した土器である。沈線は二本のものと三本のものがある。

170の口縁部はラッパ状に聞くと思われる。R{L 繩文を施文後、三本の沈線を縦位に施し、沈線間を磨消している。171は2本沈線の縣垂文を施し、沈線間を交互に磨消している。磨消しが不充分なため繩文が残っている。繩文は L{R である。172, 3本沈線による縣垂文が認められる。繩文は R{L, 沈線間は磨消されない。173, 174は R{L 繩文を斜位に施文したため、条が縱に立ったように施文されている。173は3本沈線で内部を磨消しており、繩文は半ばより縦位回転のため条は斜行している。174は沈線間の磨消しが不充分のため繩文が残っている。186 R{L 繩文を施文したのち沈線による縣垂文を有するものである。底部に近い土器である。

第4類 (第191図 175～185)

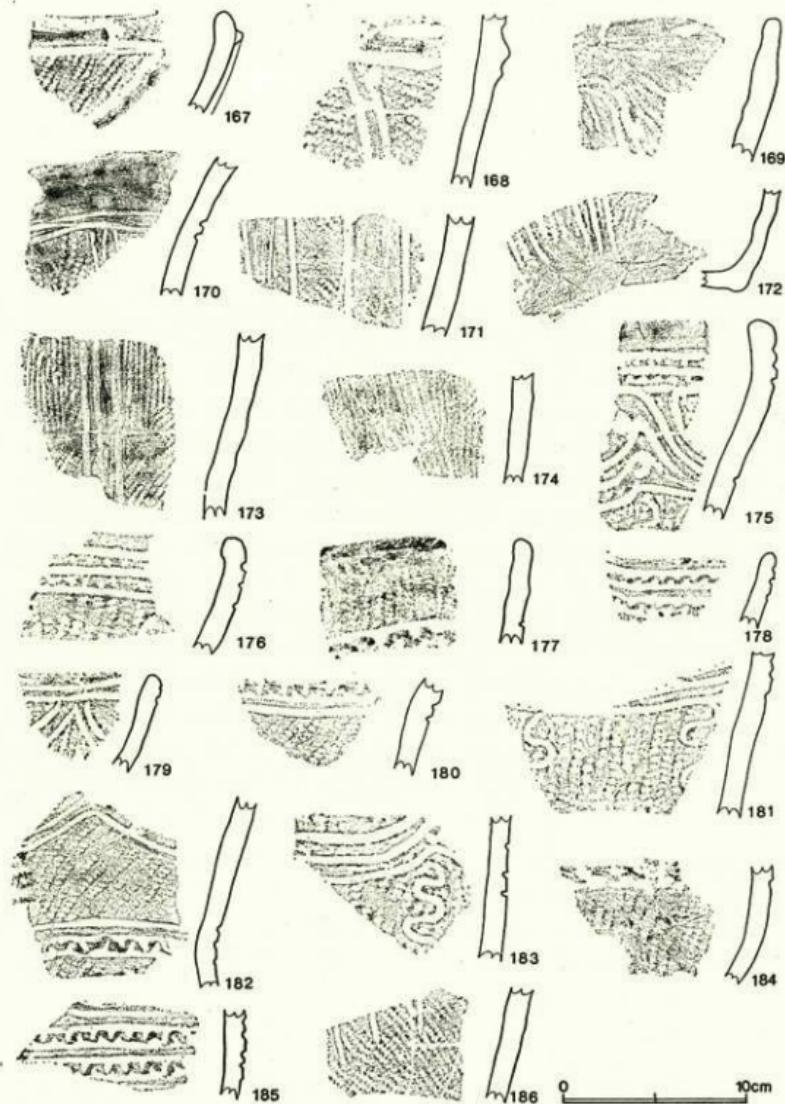
地文に繩文を施した連弧文土器である。2本及び3本の沈線のものがある。

175～179は口縁部である。175, R{L 繩文を地文とし、3本沈線を口縁下に巡らしたのち弧線を描くものである。口縁下の沈線内には刺突文が施される。181, 183は175の胴部破片と思われる。沈線による弧線下より蛇行する沈線が描かれている。176, R{L 繩文を地文とし、3本の沈線が平行に施文される。177, 178は沈線内に交互刺突文を施している。180, 184は隆帯上に刻みを入れている。180は R{L, 184は0段多条の R{L である。179は2本沈線により平行沈線と弧線を描くものである。180も182, 185は2本沈線と交互刺突文を施している。182は R{L 繩文を施文している。

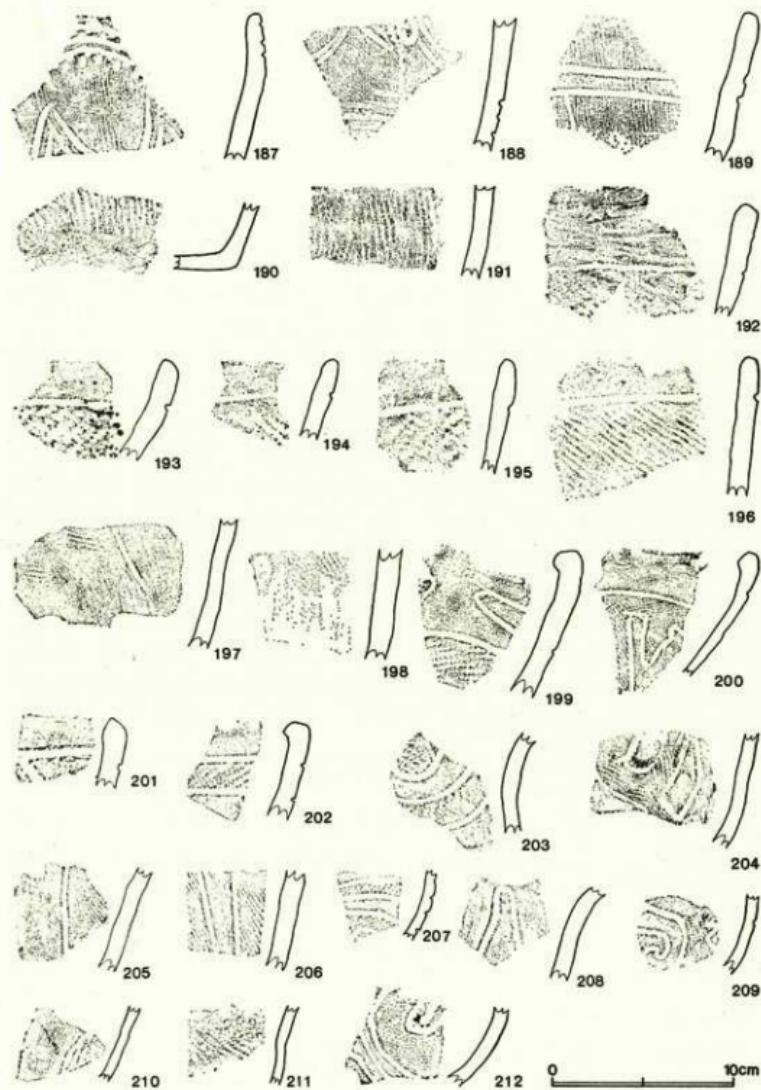
第5類 (第196図1, 第192図 187～191)

櫛歯条線及び撚糸文を地文として持つ連弧文土器を本類とした。

187～189は地文に櫛歯条線を持ち、沈線により平行、弧状に文様を描くものである。187は口縁下の沈線内に刺突を持ち、胴部は弧線を描いている。188は2本の弧線と平行沈線を描いている。189は2本沈線を描いている。第196図1は口縁部に交互刺突文を一巡させたのち沈線を施す。胴部には原体Lの撚糸文を施文したのち3本沈線による弧線を描いている。190, 191は原体Lの撚糸文が施される。190は底部、191は胴部であり、沈線は施されないが当時期の撚糸文はほぼ連弧文に限られるようである。



第191図 グリッド出土土器(7)



第192図 グリッド出土土器(8)

第 6 類 (第195図 2, 第196図 3, 4, 第191図169)

第195図 2 は浅鉢形土器である。口縁部は直立し、口唇は平らになり、若干折り折し口縁のように肥厚する。色調は黄褐色、焼成は良好である。第196図 3 は口縁部に狭い無文部を有し 5 本? 単位の櫛歯条線を器面全面に施文するものである。4 は極めて珍しい器形を示している。胴部半ばで強いくびれを持ち、ひょうたんのような形状を示すものと思われる。文様は口縁下に一条の微隆起線文が施される以外は無文である。169 は口唇部が細くなる。口縁部を無文にし、以下 $L\{R$ 縄文が施文される。

第10群土器 (第195図 3, 4, 第192図 192~212, 第193図 213~235, 第194図 236~243)

後期初頭称名寺式土器を本群とした。沈線内を縄文、刺突文によって充填する。

第 1 類 (第192図 193~198)

口縁部を無文化し沈線を一本横走させ、斜行縄文を施文するものである。192, 194, 196 は $R\{L$ 193, 195 は $L\{R$ を施している。198 は把手であり $L\{R$ が施文されている。

第 2 類 (第195図 3, 第192図 199~212)。

沈線内に縄文を充填せるものである。本類土器は複雑な文様構成を持つため、破片からでは推定しにくく、文様ははっきりとしないもの多かった。第195図 3 は埋甕として使用されていた。本類の中では文様の全容を推測できる唯一のものである。文様は渦巻文と縣垂文が交互に配される。模式図のとおり 4 単位である。渦巻は 4 個とも同様の様相を呈するが縣垂文は全て異なった様を示している。しかも 1 ヶ所文様が欠けている。沈線→ $L\{R$ 縄文の順に施文されている。色調は明赤褐色、胎土には細砂が含まれる。焼成は良好であるが 2 次加熱をうけたためか脆弱化している。第192図 199~202 は口縁部である。口縁部内に稜を持つ。199 はゆるい波状口縁を呈する。波頂部に向かって沈線による向かい合わせの文様を配する。縄文は $L\{R$ 縄文が充填される。200 はハート状に無文部が形成され平行線により文様が描かれる。細かい $L\{R$ 縄文が施文される。201, 202 は沈線内に $L\{R$ 縄文が充填される。203~212 は胴部破片であり縄文が充填される。210 は櫛歯条線が沈線内に充填されるものである。203, 207, 212 は渦巻状に沈線が配され、T字状になる。211 は刺突に列点を 2 列に配し $L\{R$ 縄文を施文するものである。

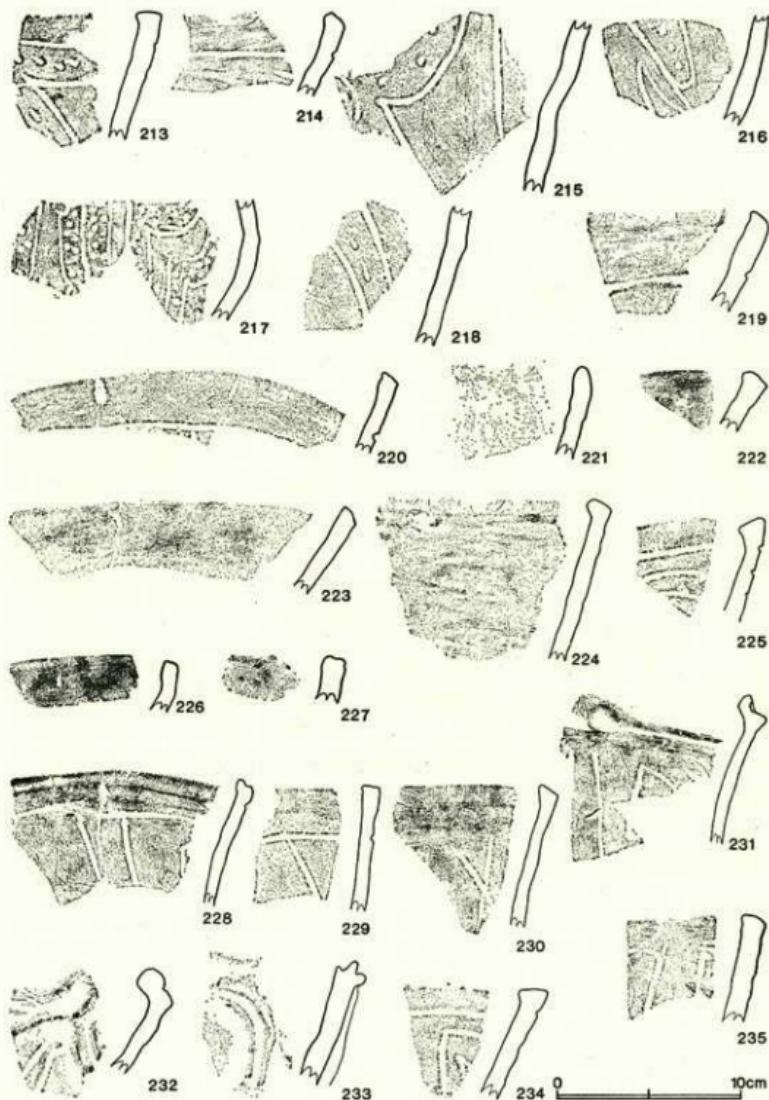
第 3 類 (第195図 4, 第193図 213~218)

沈線内に刺突による列点を有するものである。第195図 4 以外は第 2 類と同様、全体の文様は不明である。

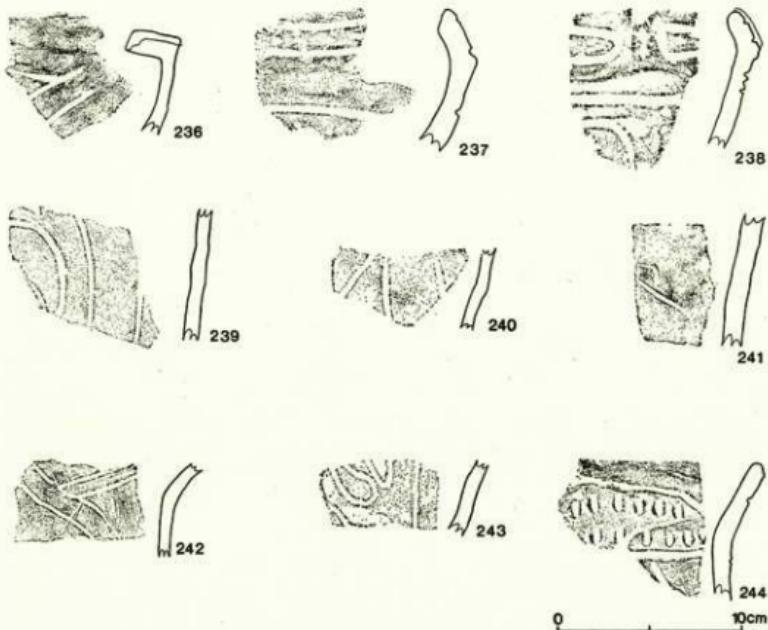
第195図 4、胴部下半を全く欠いているため全体像は不明である。スペード状の縣垂文と鉤状の文様とが交互に施文される 4 単位の文様を配するものであろう。色調は明褐色を呈しころどころ黒くすり付いている。213, 214 は口縁部である。沈線内に一列の列点文を施している。215~218 は胴部破片である。215 はスペード状の文様を示している。217 は列点が密に施される。

第 4 類 (第193図 219~232, 234~235, 第194図)

文様を沈線により書き出すものであり、沈線内には文様が何ら施文されない。219~227 は口縁部無文部の土器であり内部に稜を持つ。225 は明らかに本類であるが他は 3 類との見分けはつきにくい。228、沈線を横走させ、縦に縣垂文風の沈線を施している。229, 230 は胴部文様は格子目文



第193図 グリッド出土土器(9)



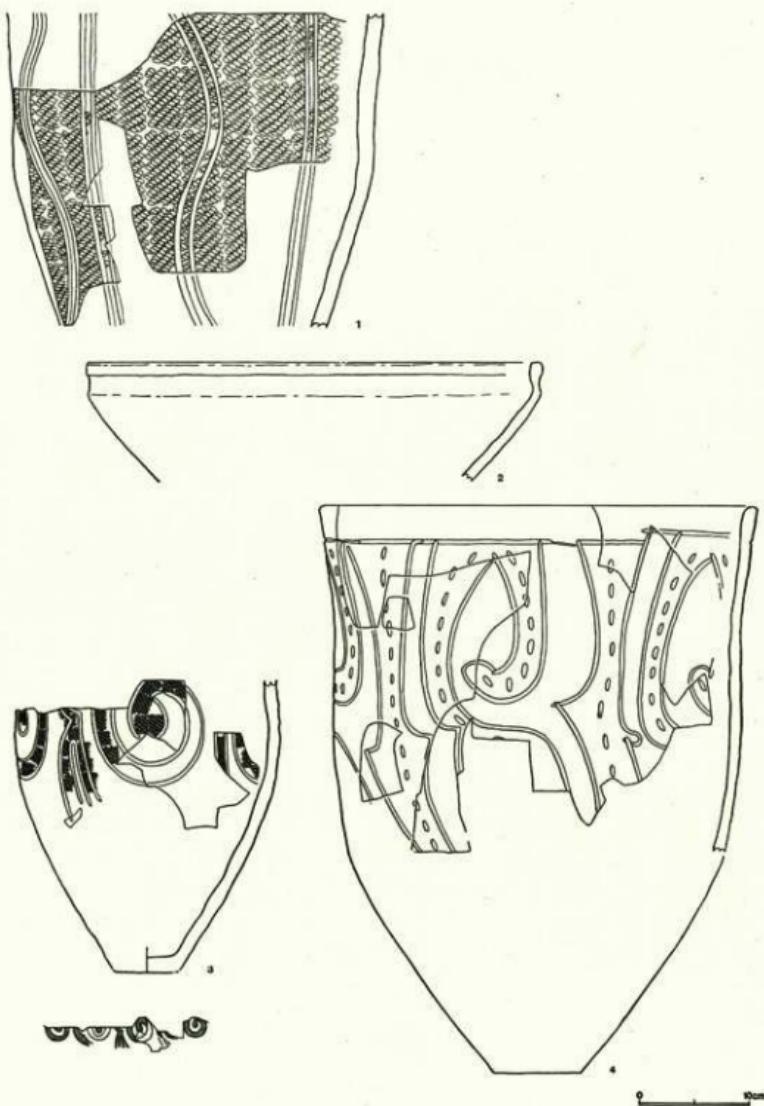
第194図 グリッド出土土器 (10)

を持つ。231, 232 は口縁部が「く」字状に内傾する。231 は口唇部下に 1 条沈線を施し、胸部にも沈線で文様を描く。232 は口縁に沿って隆起線を施し、胸部には 2 本の沈線を垂下させる。234, 235 は口縁部内部に低い稜を持つ。236～238 は「く」状に内傾する口縁部である。237, 238 は沈線で区画文を作り口縁部文様帯を作る。胸部は横位に沈線を描き、以下沈線で文様を描く。239 は曲線的な沈線で渦巻く。240, 241 は格子目状の文様を描く。242, 243 は沈線で文様を描いている。

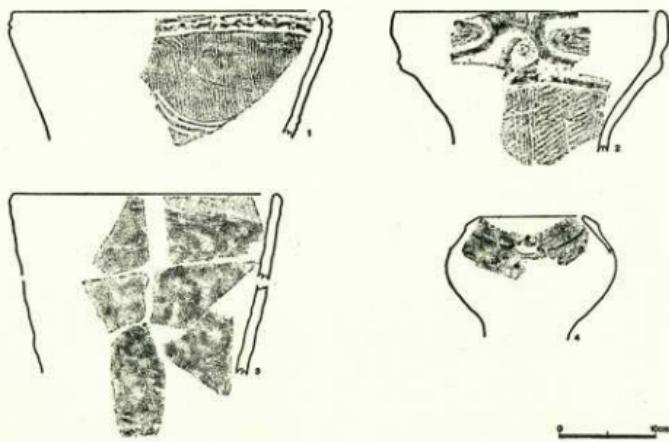
第11群土器（第194図 244）

沈線で梢円形の区画をつくり、内部に刺突文を施す。縄文晩期安行 3C 式であろう。

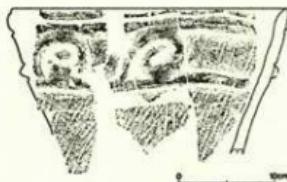
(大塚 孝司)



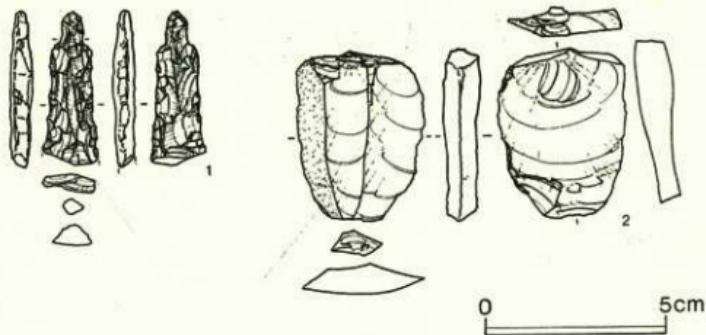
第195図 グリッド出土土器 (11)



第196図 グリッド出土土器 (12)



第197図 グリット出土土器 (13)



第198図 馬込大原遺跡出土石器 (1)

e. 石器

今回の調査において確認された石器の出土状況は、2号住居址の打製石斧1点と石皿の破片を除けば全て包含層出土であった。器種に関しては石鏃、ドリルと言った小形の石器が見られず、従来の器種組成を満すものではなかった。このように貧弱な器種組成しか示さない遺跡は思うより多く、これからは、十分な器種組成を満す遺跡との対比研究が必要になってくるものと考えられる。

石匙（第198図1）

今回の調査においてただ一つの小形石器である、石質は黒曜石製作されており、上部に抉りを入れ、つまみを作り出した縦長石匙で、断面はかまぼこ状を呈している。下部は欠損しており長さは不明である。作りは周辺調整が急角度であり刃部を作っていると言うべきか、形を作っていると言うべきか迷うところであり、異形石器的な感じを受ける。

剥片（第198図2）

表面に2条の剝離痕をもち、打面を作っており、形の整ったものと言える。

打製石斧（第199図3～5）

4点出土したうちの2点が完形であった。4は刃部を直線状に作っている。背面は刃部側が少し抉れる形になり、刃部に行くほど薄くなっている。それは刃部への直角方向からの剝離によるもので、平面形と合わせ考えると刃部の再調整（加工）と思われる。これは刃部が何らかの理由で再調整（加工）しなければならない時に（もともと直線状の刃部であった可能性もあるが）刃部を直線状にしたものと思われる。

磨製石斧（第199図6～8）

3点が出土した。そのうち6、7が完形であった。3点とも形の整ったものであった。

6は縦断面が弯曲を呈し薄手である。7は縦断面を見ると刃部近くの表面が大きく抉り取られているように見えるが、研磨が剝離面を切っており、使用による破損とは考えがたく、製作過程で生じたものと考えたい。

礫器（第199図9・10）

9は四角形の礫の長軸両端を表裏に切るように加工を施している。10は梢円礫の一端の表裏両面に剝離を一つ一つ施している。全体形は途中で折れているため不明である。

たたき石（第200図11）

円礫の一端に多くの敲打痕を残す。

すり石（第200図12・13）

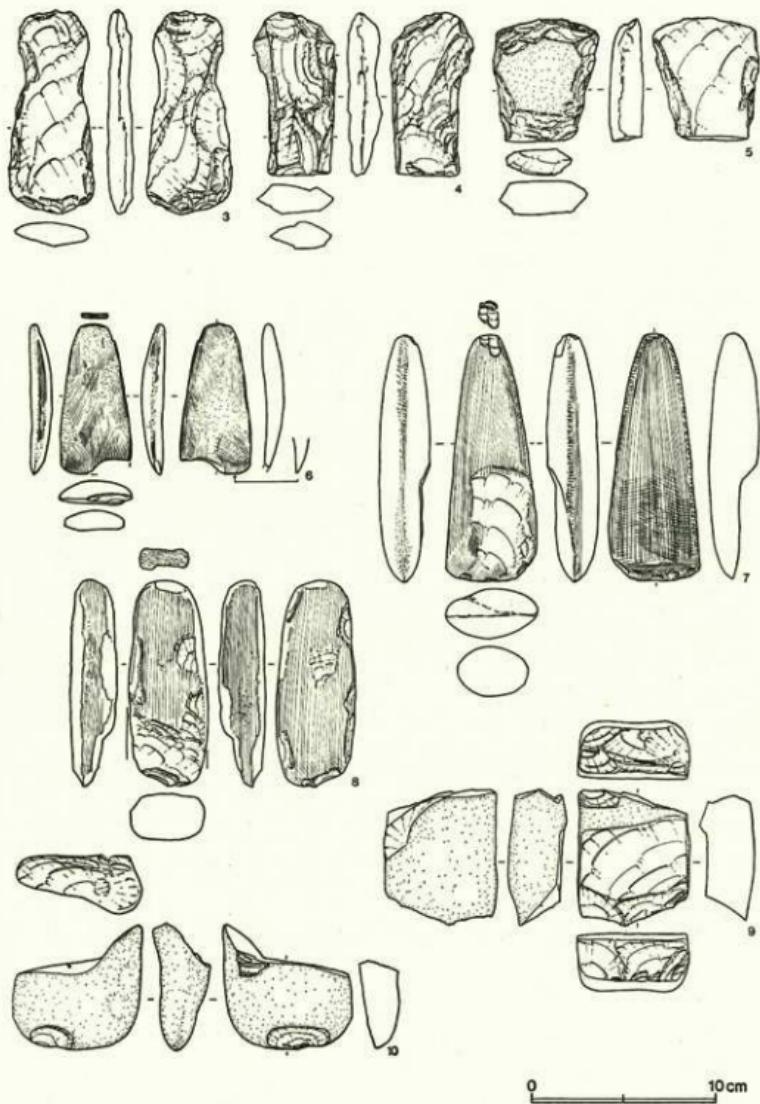
円礫の腹部に研磨痕を残すものを示した。12、13共に腹部に指先ぐらいの産みを作り、長軸の一端に敲打痕を残す。

石皿（第200図14・15）

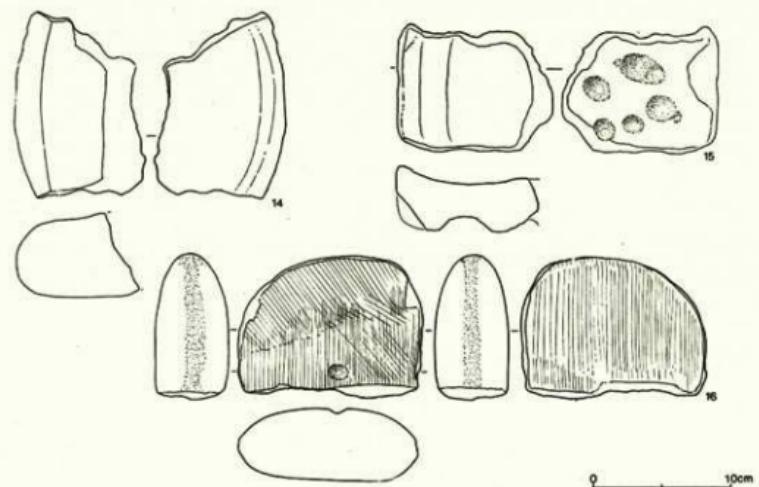
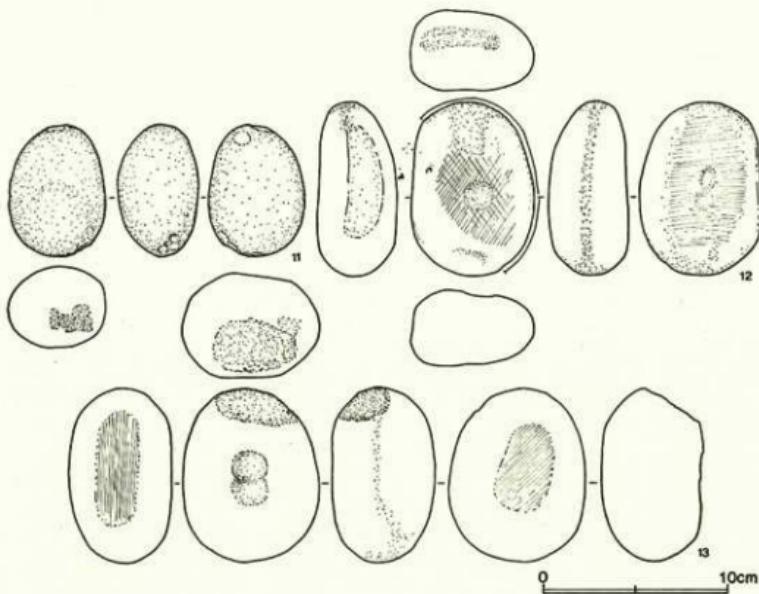
2号住居址の一点を含め全て破片であった。裏面に産みを有する物と有しない物があり、今回の調査では石質によって分けられた。

台石（第200図16）

大形の梢円礫の両面に少しはあるが研磨痕が見られ、片面に小さな産みが一つ見られる。形状



第199図 馬込大原遺跡出土石器（2）



第200図 馬込大原遺跡出土石器（3）

は半分に欠損しているため不明である。

(西井 幸雄)

No.	器種	地點	法量(cm)			重さ(g)	石質	
			長さ	幅	厚さ			
1	石匙		—	1.55	0.65	0.37	黒耀石	下半分欠損
2	剥片	24区	4.65	3.6	1.05	1.57	頁岩	
3	打製石斧	16-G	10.9	4.6	1.5	9.45	ホルンフェルス	
4	"	24-F	8.9	4.6	1.9	7.10	砂岩	
5	"	2P-E	—	5.8	1.9	9.83	ホルンフェルス	下半分欠損
6	磨製石斧	35-E	8.1	3.8	1.5	6.11	砂岩	
7	"	40-F	13.2	5.0	28.5	24.00		
8	"		—	4.3	2.6	20.00	凝灰岩	
9	礫器	16-G	7.3	6.2	3.1	21.81	安山岩	
10	礫器	14-G	6.8	7.0	3.35	13.11	安山岩	
11	たたき石	17表採	7.2	5.3	4.5	19.87		
12	すり石	32-G	9.4	6.75	4.3	38.74	砂岩	
13	"	28-C	9.4	7.5	5.7	61.68	砂岩	
14	石皿	15-H	—	—	—	94.03	玄武岩	
15	石皿	28-I	—	—	—	37.24	安山岩	
16	台石	32-F	—	13.7	5.5		花崗岩	裏に穴を持つ
1	打斧	2住-1	9.6	7.0	1.6	13.9	安山岩	
2	石皿	2住-2				49.88	安山岩	裏に多穴

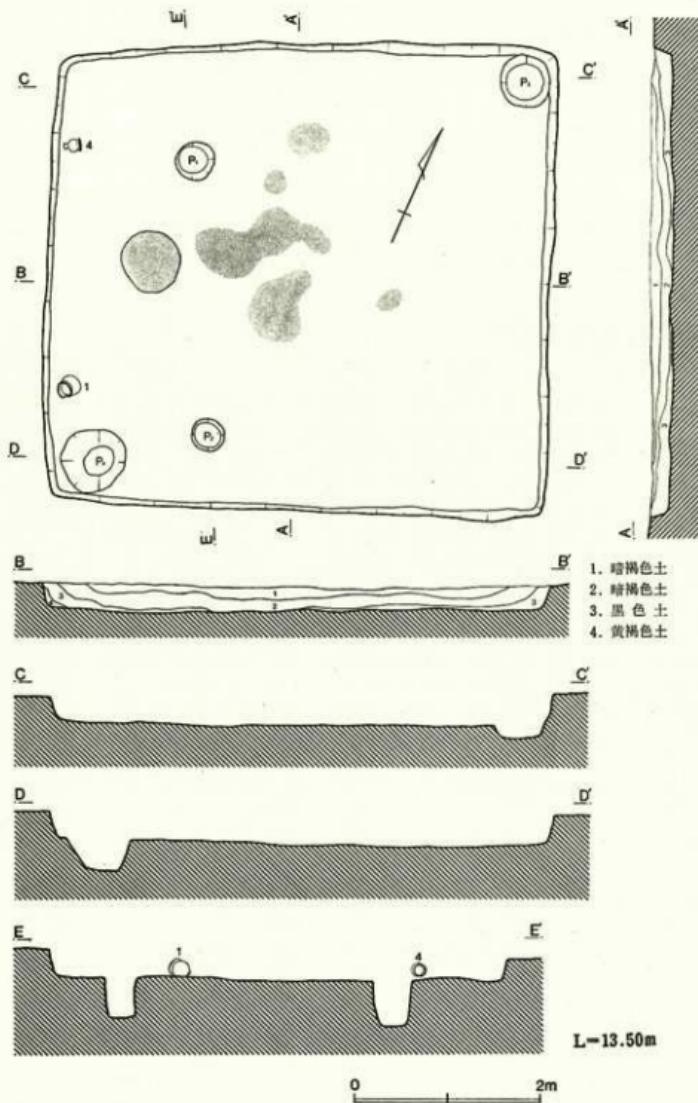
(2) 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構と遺物

4号住居址（第201図）

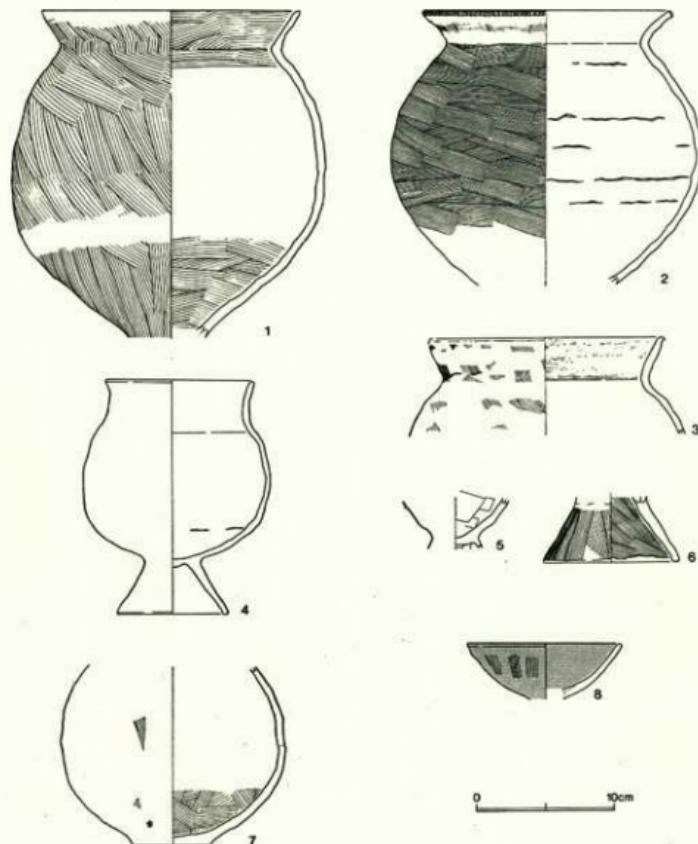
1号住居址の南西4.3m、3号住居址の西6.0mに位置する。5.4m×5.0mのほぼ方形を呈し、主軸方向はN-113°-Wである。ローム面から床面までの深さは20~30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。焼土が住居址中央付近に大量に残っていたが、このうち炉址は西端のほぼ円形を呈するものである。中心の位置は住居址の対角線の交点から方向角5°、距離160cmである。ピットは4個検出された。うちP₁・P₂が主柱穴と考えられ、深さはP₁50cm、P₂44cmである。北コーナー際と南コーナー際にはP₃・P₄があるが、性格は不明である。深さはP₃が15cm、P₄が35cmである。遺物は土器1と4が西壁際の床面直上から出土した以外はすべて覆土からのものである。

4号住居址出土土器（第202図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	1	口径 18.6 胴径 22.8	頸部「く」の字状に屈曲し内側鋭い棱を持つ。口縁部直線的に開き、比較的鋭い口唇部に至る。胴部は丸味を帯び、最大径中位に存す。	外面ハケ整形後、口縁部ヨコナデ、胴下部(粘土帯接合部)ヘラ削り。内面ハケ整形後、胴上半工具によるナデ整形。橙色～褐色。	胴部ほぼ完存。 床直。
台付甕	2	口径 17.6 胴径 21.4	頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部外反気味に開く。平坦な口唇部にハケ状工具による刻み目。球胴で最大径中位に存す。	外面ハケ整形。口縁部ヨコナデ。胴下部ヘラ削り。内面工具によるナデ。黄灰色。	
甕	3	口径(16.4)	頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部直線的に開く。	外面～口縁部内面ハケ整形後ナデ。にぶい黄橙色。	
台付甕	4	口径 11.7 胴径 13.8 底径 7.2 器高 16.9	頸部2段にゆるやかに屈曲し、丸い口唇部に至る。球胴で最大径やや下位に存す。脚部直線的に開く。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面ヘラ削り。内面工具によるナデ。脚部外面ヘラ磨き、内面工具によるナデ。明黄褐色。	ほぼ完存。床直。
台付甕	5		4同様小型と考えられる。	外面ヘラ磨き。内面工具によるナデ。暗オリーブ灰色。	
台付甕	6	底径 9.8	脚部直線的に開く。	内外面ともハケ整形。にぶい黄橙色。	
甕	7	胴径(16.5) 底径 5.4	胴部最大径やや下位に存す。平底。	外面ハケ整形後タテヘラ磨き。底部ヘラ磨き。内面ハケ整形後ヨコナデ。にぶい黄橙色。	
高杯	8	口径(10.9)	内窵して開き、丸い口唇部に至る。	外面タテハケ後タテヘラ磨き。内面タテヘラ磨き。内外面とも丹彩が残る。にぶい橙色。	



第201圖 4号住居址



第202図 4号住居址出土遺物(1)

4号住居址出土土玉(第203図)

ほぼ円筒形を呈し、約半分欠損している。長さ3.6cm、最大胴径は推定3.4cm、重量は27.1gである。にぶい黄橙色。

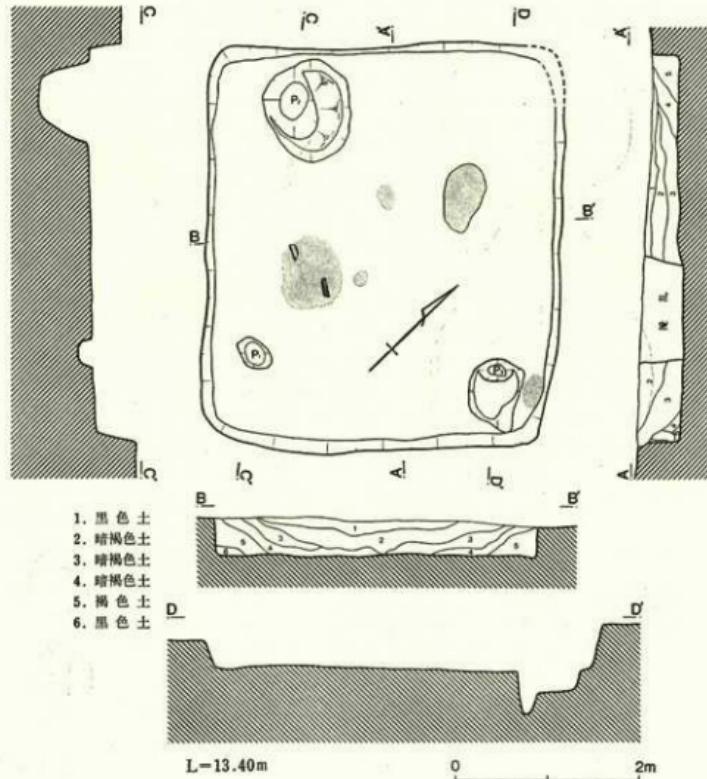


0 5cm

第203図 4号住居址
出土遺物(2)

5号住居址(第204図)

2号住居址の北東 4.3 m, 3号住居址の北西 3.2 m に位置する。3.9 m × 4.4 m の隅丸方形を呈し、主軸方向は N—49°—E である。ローム面から床面までの深さは 30~45 cm で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で、その中心は住居址の対角線の交点から方向角 328°、距離 110 cm に位置し、主軸方向と直角に長い椭円形を呈する。ピットは 3 個検出された。そのうち P₁ が柱穴と考えられるが、深さは 15 cm と浅い。P₂・P₃ は性格不明であるが、その形態から考えて柱穴を抜き取った痕の可能性もある。住居址中央やや南よりに若干の焼土と炭化材が見られた。



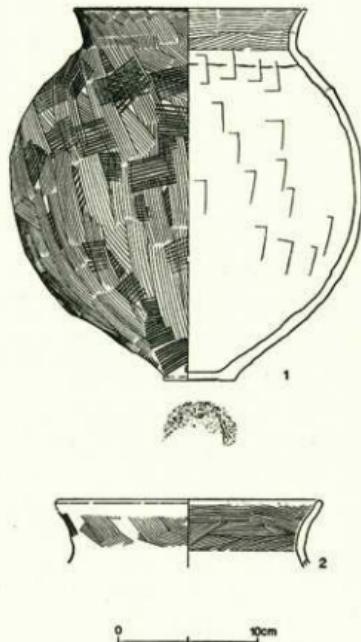
第204図 5号住居址

5号住居址出土土器（第205図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 16.2 胴径 25.2 底径 5.1 器高 26.6	頸部2段に屈曲し、口唇部に細かい割み目を有す。胴部は丸味を帯び、最大径中位に存す。底部外縁にドーナツ状の粘土を貼付。	胴部叩きを施した後、比較的粗いタテハケ整形。口縁部外面タテハケ、内面ヨコハケ整形。胴部内面工具によるナデ。全体的に黒斑を受けているが、残りはにぶい褐色。	80%残存。
壺	2	口径(18.7)	頸部2段に屈曲し、やや内唇気味に開き、丸い口唇部に至る。	外面ナナメハケ後ヨコナデ。内面ヨコハケ整形。にぶい橙色。	

5号住居址出土土玉（第206図）

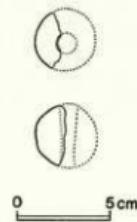
半分以上欠損しているが、球形を呈すると考えられる。現存長3.1cm、現存重量10.4gである。黒褐色。



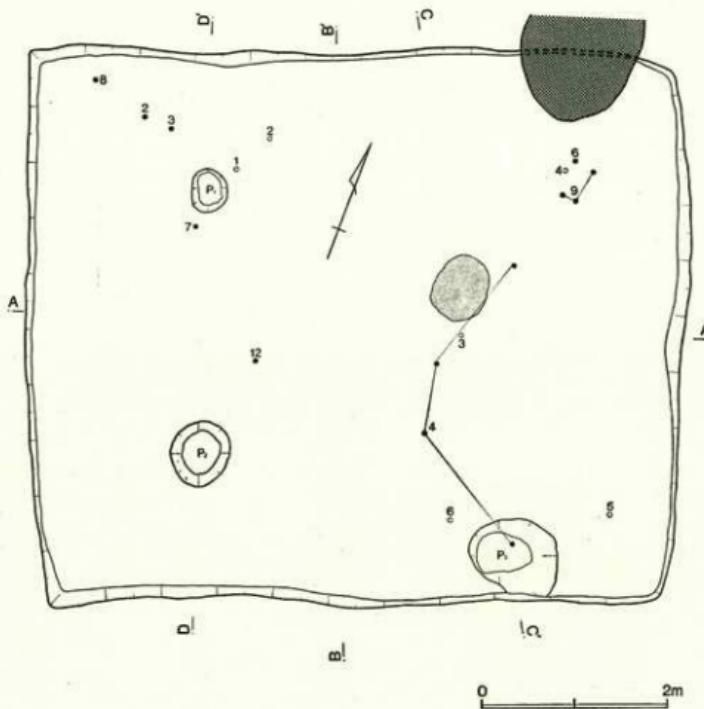
第205図 5号住居址出土遺物（1）

6号住居址（第207・208図）

1号住居址の南東3.2m、2号住居址の東6.0mに位置し、北壁東端を5号土壤によって切られる。6.0m×7.1mの長方形を呈し、主軸方向はN-21°-Wである。ローム面から床面までの深さは30~50cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で、その中心は住居址の対角線の交点から方向角66°、距離125cmに位置する。ピットは3個検出された。うちP1・



第206図 5号住居址出土遺物（2）

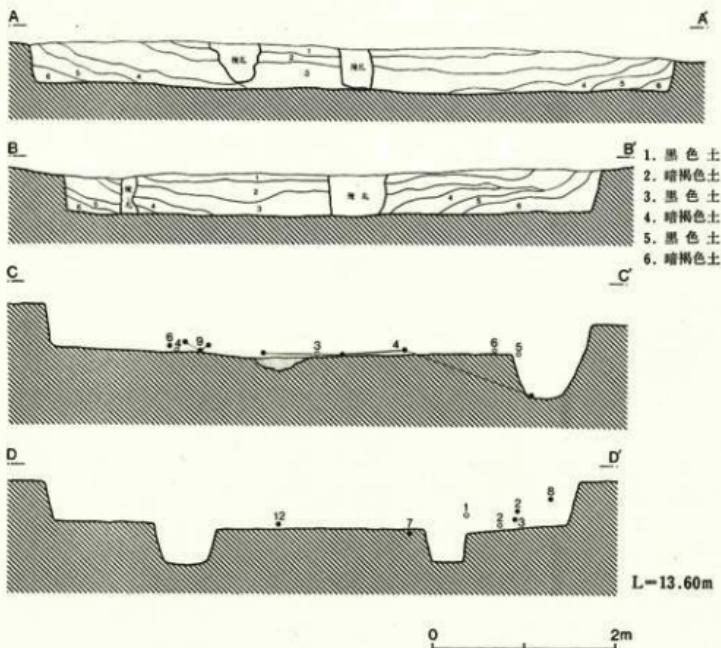


第207図 6号住居址(1)

P_1 が主柱穴で、深さは P_1 , 35 cm, P_2 , 45 cm である。 P_3 は貯蔵穴と考えられ、中心の位置は方向角147°、距離 275 cm で、大きさ 95 cm × 80 cm、深さは 50 cm である。遺物は土器4がかなり散らばって床面直上と貯蔵穴の底とから出土したほか、土器7、土玉3・4・5・6が床面直上からの出土であり、残りはいずれも覆土から検出されたものである。

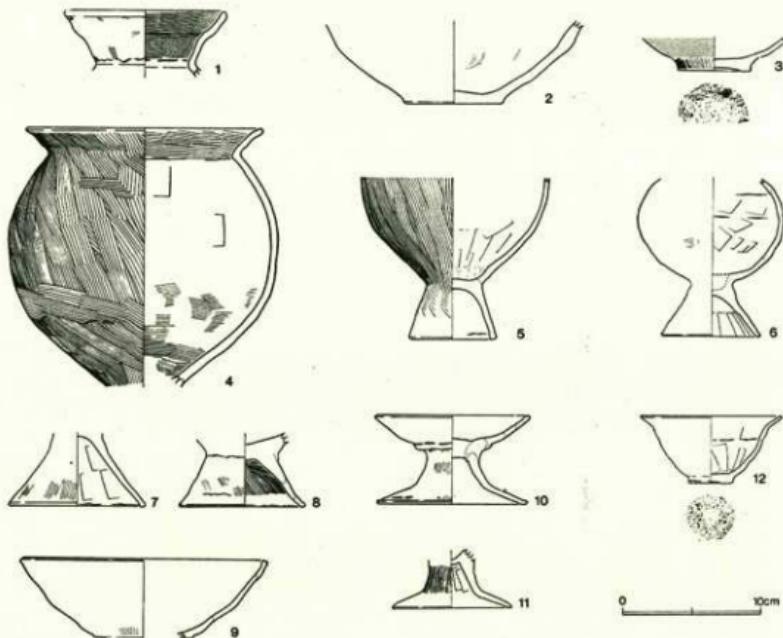
6号住居址出土土器（第209図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺 (小型壺)	1	口径11.3	頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部は曲線的に立ち上がった後、内窩気穴に開く。口唇部は丸い。	外面タテハケ後タテヘラ磨き。内面ヨコハケ整形。口唇部ヨコナヂ。細砂粒多く含む。にぶい赤褐色。	
壺	2	底径 6.9	胴下部で肥厚(粘土帯接合部)。	外面ヘラ磨き調整。内面ハケ整形後ヘラ磨き。胎土に小石含。橙色。	



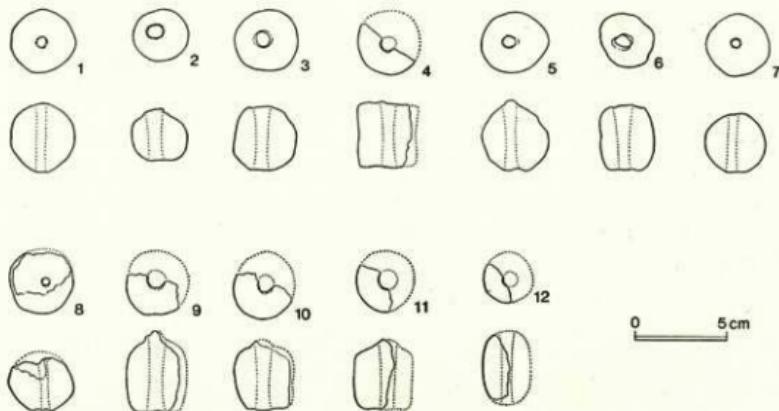
第208図 6号住居址(2)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
小型壺	3	底径(5.2)	底部外縁にドーナツ状の粘土を貼付。	外面ハケ整形後タテヘラ磨き。丹彩。にぶい橙色。	
台付壺	4	口径(16.9) 胴径(19.5)	頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部やや外反気味に開き、丸い口唇部に至る。口縁部やや肥厚。胴部は丸味を帯び、最大径やや上位に存し、直線的にすぼまって脚部に至る。	外面タテヘナメハケ整形。口縁部内面及び胴部内面下半ヨコハケ整形。口唇部へ口縁外面ヨコナギ。胴部内面上半工具によるナデ整形。胴下半黒斑が残る。胎土に小石含む。橙色。	床直。
台付壺(S字)	5	底径 6.3	脚部直線的に開き、内側に折り返しを有す。	外面タテハケ整形、内面工具によるナデ整形。脚部外面ハケ目を鋸歯状に残す。胎土荒く、細砂粒を大量に含む。浅黄橙～にぶい橙色。	
小型台付壺	6	胴径 10.5 底径 (7.1)	胴部ほぼ球形で最大径中位に存する。脚部外反気味に開く。	外面ハケ整形後丁寧なヘラ磨き。内面工具によるナデ整	



第209図 6号住居出土遺物(1)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	7	底径(9.8)	脚部外反気味に開く。	外面1/3に黒斑。胎土に小石含む。にぶい橙色。 外面タテハケ整形後タテヘラ磨き。内面工具によるナデ整形。にぶい赤褐色。	床直。
台付甕	8	底径(9.1)	脚部上半内弯、下半外反気味に開く。	外面ナナメハケ整形後ヨコナデ。内面ナナメハケ整形後下半のスヨコナデ。にぶい赤褐色にぶい橙色。	
高杯	9	口径(17.3)	やや内弯気味に開く。口唇部外面に浅い沈線。	外面タテハケ整形後タテヘラ磨き。上半部はヨコナデ整形後ヘラ磨き(粗い)。内面ナナメヘラ磨き。上半部は粗くヨコナデ痕残る。橙色。	
高杯	10	口径10.9 底径(10.8) 器高(6.5)	杯内部内弯気味に開き、端部は丸い。脚部外反気味に大きく開き端部は丸い。	杯部内外面とも丁寧なヘラ磨き。脚部タテハケ整形後ヘラ磨き。接合部に粘土紐を巡ら	



第210図 6号住居出土遺物(2)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯	11	底径(8.6)	ほぼ直線的に開いた後「く」の字形に屈曲してやや内弯気味に開く。端部シャープ。	す。橙色。 外面ハケ整形後ナデ整形。内面ハケ整形後工具によるナデ整形。にぶい橙色。	
塊	12	口徑(9.9) 底径 3.2	体部内弯気味に開き、口縁部屈曲して直線的に開く。器内薄い。底部外縁にドーフ状の粘土を貼付。	外調整不明。内面工具によるナデ整形。胎土に白色細砂粒を多量含む。にぶい橙色。	

6号住居出土土玉(第210図)

3・4・5・6が床面直上からの出土であり、他は覆土から検出された。1は球形を呈し、長さ3.3cm、最大胴径3.3cm、重量37.5g。黒褐色。2は歪んだ球形を呈し、長さ2.7cm、最大胴径2.9cm、重量18.4g。にぶい黄橙色。3は歪んだ球形を呈し、長さ3.5cm、最大胴径3.5cm、重量39.2g。にぶい黄橙色。4は半分欠損しているが、円筒形を呈し、長さ3.2cm、最大胴径は推定3.3cm、残存重量は19.7gである。にぶい黄橙色。5は歪んだ球形を呈し、長さ3.9cm、最大胴径3.7cm、重量35.7g。黒褐色。6は俵形を呈し、長さ3.5cm、最大胴径3.0cm、重量29.3g。黒褐色。7は球形を呈し、長さ3.2cm、最大胴径3.3cm、重量33.5g。黒褐色。8は一部欠損しているが、ほぼ球形を呈し、最大胴径3.6cm、残存重量27.7g。にぶい黄橙色。9は半分以上欠損しているが、俵形を呈し、長さ4.3cm、残存重量21.3g。にぶい黄橙色。10も半分欠損しているが、俵形を呈し、長さ3.7cm、残存重量22.8g。にぶい黄橙色。11は2/3欠損するが、俵形を呈し、長さ3.7cm、残存重量14.0g。明灰黄色。12は大半欠損するため、法量は不明。残存重量7.0g。にぶい黄橙色。

(藤原 高志)

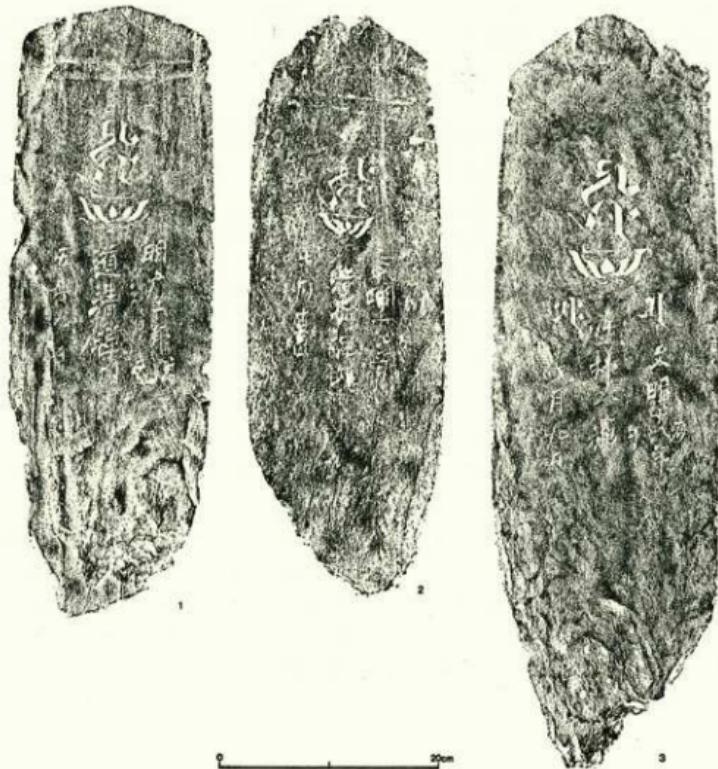
(3) 中・近世の遺構と出土遺物

板碑（第211図）発掘区西端、台地の斜面部から3基、いずれもローム面直上の遺物包含層からほぼ水平に横たわった状態で検出された。すべて緑泥片岩である。

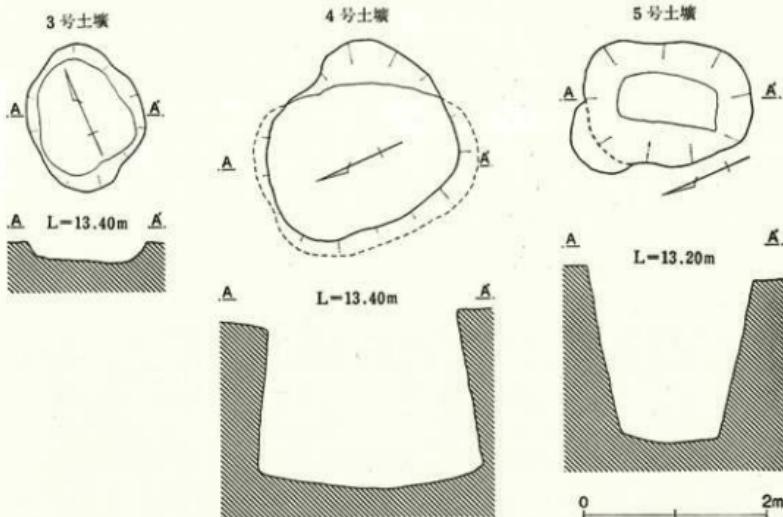
1は表面が上になって出土した。枠線を持ち、蓮台の上の主尊は阿弥陀種子で、薬研影りである。銘文は「明応二年（1493）癸丑 道清禪門 五月九日」である。高さ56cm、上幅16cm。

2は裏面が上になって出土した。簡素な枠線を持ち、蓮台の上の主尊は薬研影りによる阿弥陀種子である。銘文は「文明十八年（1486）道□禪門 十月十二日」と記されており、高さ52cm。

3も裏面が上になって出土した。枠線はかすかに確認できる程度で、蓮台の上の主尊は阿弥陀三



第211図 板碑拓影図



第212図 3・4・5号土壙

尊の種子である。銘文は「文明十八年（1486）丙午 □林大□四月九日」である。高さ68cm、上幅18cm。

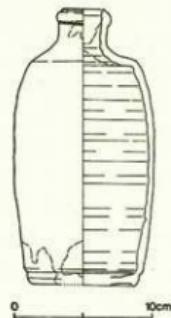
土壙（第212図）近世と考えられる土壙が3基検出された。

3号土壙は4号住居址の西1.3mに位置し、1.6m×1.3mの不整椭円形を呈する。底はほぼ平らで、ローム面からの深さは約20cmである。底部中央からタニシの貝殻が大量に検出された。他に灰釉徳利（第213図）など近世の陶磁器片が覆土から出土している。灰釉徳利は胴部下半へら削り、口頸部～肩部が回転ナデ整形で、ほぼ全面に浅黄色の釉がかかっている。江戸時代後期～明治時代初期のものと思われる。

4号土壙は4号住居址の南東6.5mに位置し、2.2m×1.8mの不整椭円形を呈する。壁は3方でオーバーハングし、底はほぼ平らで、ローム面からの深さは1.8m前後である。

5号土壙は6号住居址の北東コーナーを切って検出された。2.0m×1.4mの不整椭円形を呈する。壁はまっすぐ急傾斜し、平坦な底に至る。ローム面からの深さは1.9m前後である。

4・5号土壙からは時期・性格を決定する遺物の出土はみなかった。



第213図 3号土壙出土遺物

（藤原 高志）

4 結 語

(1) 繩文時代の遺構と遺物について

馬込大原遺跡で検出された縄文時代の遺構・遺物の概略は前述したとおりである。発見された遺構は住居址3軒、炉穴、土坑である。このうち住居址では黒浜式、中期Ⅲ期(註1)、称名寺式土器を出土する住居址各1軒である。炉穴は縁辺部を中心として存在した。土坑内より若干の土器の出土があった。他に包含層より土器の出土があり、遺構出土のものは遺構ごとに、グリッド出土土器は群に分類して報告した。遺構、遺物について調査時や現在考えていることについて概略を述べたい。

a. 遺 構

集落内の片隅を発掘したため各時期の遺構が出土したが積極的に遺構の分布を述べる程ではない。黒浜式期の住居址は当時期の住居址としては、平面形態は方形を呈するものと思われ、普通であろう。深さは大変深く少し違和感を感じざるをえない。中期の住居址は遺跡の南側斜面部にかかるて検出された。形状はほぼ円形を呈している。炉や柱穴の配置を考えると柱穴の配置が悪く、若干の調査時のミスを感じざるをえない。称名寺式期の住居址は隅の4/1が廃されているので何とも言い難いが円形を呈するものであろう。炉址は発見できなかったが、住居址ではないといえなない積極的根拠もない。該期の住居址は張り出し部を持つ住居址や敷石住居址のものが多く見られるが、当遺跡の住居址では張り出し部は検出されなかった。土坑が1基検出されたが円形のものである。調査時には土坑は多數検出される可能性があったので精査し検出に努めたが、1基確認されたのみであった。この土坑の性格等を考える上で興味深い。

b. 土 器

住居址包含層より出土した土器はコンテナで20箱程度である。黒浜式土器は米島貝塚の土器の考察の中で2細分案(註2)が示されて以来、新井和之氏の5細分案(註3)が示され、資料の増加と相まって、黒浜式内部の形式的変遷、小地域での差の分布的面からの考察等の研究を行なうことにより新井氏の細分をいかに評価してゆくかという点が今後の検討課題であろう。次に6号住を中心とした連弧文土器の伴う時期の問題がある。当時期は地域的に大きな差が指摘されうる時期であり、東西関東の差は大きいものとして捉えられる。当遺跡では割合、連弧文土器の出土の比重が目だつといえよう。連弧文土器の派生の問題、連弧文式の変遷、加曾利E式内の変遷などさらに深化させなければならない問題があろう。後期初頭の称名寺式に属するものとしては2号住居址、1号土坑のものがある。2号住居址では埋甕と浅い覆土中から出土した土器があり、この時期の資料としては割合まとまったものといえよう。称名寺Ie式とII式の土器が出土している。また、グリッド出土の単独埋甕、復元された大形の深鉢の2個体もIe式、II式に相当するものと思われる。1号土坑出土の土器は沈線のみによる文様を持つものであり、沈線内の列点は施文されないものも多い。1号土坑出土土器をはじめ、壙之内I式との接点の土器は土坑の土器がまとまって出土してつつあり、これらの土器の研究も一步前進してゆくことが期待される。横位に沈線により区画してゆくものも見られる。称名寺式土器については今村氏、柳沢氏による詳細な研究(註4)があり、

称名寺内部の細分や、他の並行型式との検討も行なわれているが、称名寺式発生や堀之内I式との連続的関連の問題など重要な未解決の問題も残されており、今後の検討課題も多いといえよう。

(大塚 孝司)

- 註 1 谷井、宮崎他 1982「縄文中期土器群の再編」財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 の分類による。中期を XIV 期に分類し、加曾利E式は IX~XIV 期までである。
- 註 2 小林達夫他 1965『米島貝塚』庄和町文化財調査報告第 1 集
- 註 3 新井和之 1977「植房貝塚の土器とその周辺」奈和第 15 号
—— 1979「黒浜式土器研究の問題点」土曜考古創刊号
—— 1979「黒浜式土器小考」日本考古学研究所集報 II
—— 1981「黒浜式土器考追録(その 1)」奈和第 19 号
—— 1982「黒浜式土器」『縄文文化の研究 3、縄文土器 I』があり詳細に検討されている。
- 註 4 今村啓爾 1977「称名寺式土器の研究(上)(下)」考古学雑誌 63 卷 1・2 号
柳沢清一 1977, 1979, 1980「称名寺式土器論(前編)(続)(結編)」古代第 63 号, 第 66 号, 第 68 号

(2) 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構について

馬込大原遺跡の該期の遺構は、3軒の竪穴住居址である。すべて隅丸方形を呈する。3軒とも壁溝は確認できなかったが、炉は所有していた。主柱穴も 1~2 個穿たれていた。貯蔵穴は 6 号住居址で確認されたのみである。4 号住居址の P₃, P₄ が貯蔵穴となる可能性もある。主軸方向は、6 号住居址が、さら遺跡の標準タイプと似た方を示し、また 5 号住居址は、馬込新屋敷遺跡の北から東寄りに振れるタイプと同類である。4 号住居址はいずれのタイプにも属さず、後者の逆のタイプと言うことができよう。

なお、本遺跡の南側で該期の竪穴住居址が 8 軒調査されている(註 1)。これも含めると、本集落は、南東に張り出した舌状台地上に占置しており、本遺跡の 3 軒は、集落の最北端に位置することになる。

註 1 莲田市教育委員会『馬込七番第 1・第 2 遺跡』1982

住居址	大きさ(m)	主軸方向	壁溝	炉	主柱穴	貯蔵穴
4	5.4×5.0	N-113°-W	×	○	○	△
5	3.9×6.4	N-49°-E	×	○	○	×
6	6.0×7.1	N-21°-W	×	○	○	○

(3) 弥生時代末～古墳時代初頭の土器について

馬込大原遺跡では、3 軒の住居址を中心にいくつかの土器が出土している。器種は壺・甕・高杯・碗などである。以下に、さら遺跡で用いた分類方法によってこれらを類別し、特殊なものと周辺の遺跡に類例を求めるにした。

壺形土器

D類（小型壺）の6住-1の1例のみである。類例は尾山台遺跡 A4-1号住に見られる。

壺形土器

A類の口縁部に輪積痕を残すものは本遺跡では検出されなかった。

B類 口唇部に刻み目を施すもので、4住-2が該当する。頸部は「く」の字状に屈曲する。

C類 素口縁のもので、4住-1・3・4、5住-1・2、6住-4が該当する。頸部は、4住-3・4が彎曲、5住-1・2が2段に彎曲、4住-1、6住-4が「く」の字状に屈曲する。なお、4住-4は胴部外面にヘラ削りが施されている。また、5住-1は胴部に叩き目が施され、その上に比較的粗いハケ整形を行なっている。周辺の遺跡では、平林寺11号住で叩き目を施した甕が出土している。

6住-6は小型の台付甕と推察されるが、外面に丁寧なヘラ磨きを施している。

高環形土器

A類 壺底部に綾をもたず、そのまま脚台部になだらかに移行するもの。4住-8がA類に該当する。

B類 壺底部に綾をもつもの。6住-9が該当する。

なお、高環形土器のうち特殊なものとして、壺底部に粘土紐を巡らした6住-10がある。また、6住-11は脚台部のみであるが、途中で急激に彎曲している。

壺形土器

6住-12の1例のみで、口縁部が彎曲して外に開き、B類に該当する。さらなる遺跡の2例とは形態を異にしている。

（藤原 高志）

VII さら・馬込新屋敷・馬込大原遺跡の 土器器X線回析分析・電子顕微鏡観察

1. 実験

1.1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとおりである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄、乾燥した後に、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{ mm}$ の試料台にヒルバーベースで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1.2 X線回析分析

土器胎土に含まれる粘土鉱物および造岩鉱物の同定はX線回析分析法によった。

測定には理学電機製X線回析装置を用い、X線管球；銅対陰極、フィルター；ニッケル、印加電圧一電流；30 KV-15 mA、スリット系； $1^\circ-0.5\text{ mm}-1^\circ$ の条件でおこなった。

走時速度は $2^\circ/\text{min}$ 、フルスケールは800カウントとした。なお、胎土の分析に先だって原土と思われるローム質粘土の分析をおこなった。X線回析試験は原土、電気炉において 700°C 、 900°C で各々1時間焼成した試料（同一試料を石英ガラスに定着し、原土、 700°C 、 900°C と順次実験をおこなう）の3段階で実施した。その結果、組成上に大きな変化のないことを確かめた上で胎土分析をおこなった。ただ 900°C 以上になった場合の組成については明らかではなく、今後の検討が必要である。

1.3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によっておこなった。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は $\times 45$ 、 300 、 700 、 1500 、 4500 の5段階でおこない、写真撮影をした。

$45\sim 300$ 倍は胎土の組織、 $700\sim 4500$ 倍は粘土鉱物およびガラスの生成状態を観察した。

2. 実験結果の取扱い

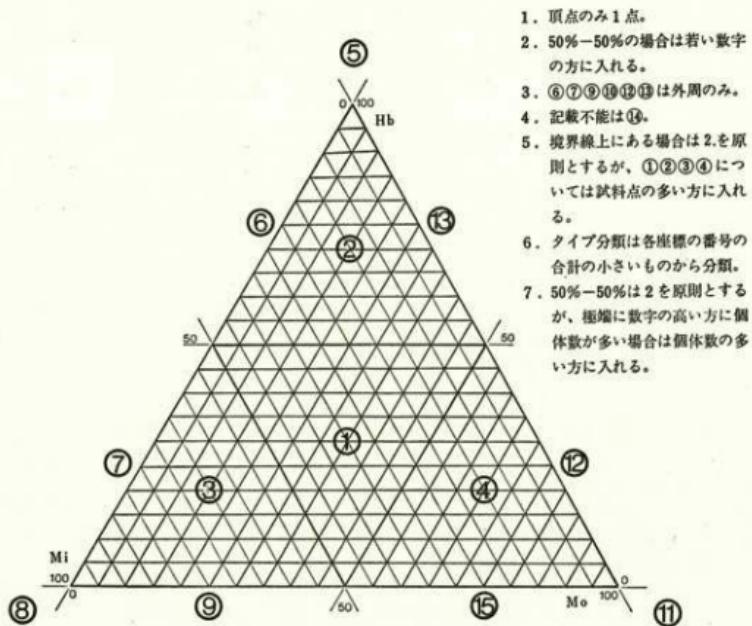
実験結果は第1表胎土性状表に示すとおりである。

第1表右側にはX線回析試験に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の組成が示してあり、左側は各胎土に対する分類をおこなった結果を示している。X線回析試験結果に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中にあらわされる各鉱物特有のピークの高さ（強度）をmm単位で測定したものである。

ガラス量は大略 $2\theta=10^\circ\sim 20^\circ$ の範囲にあってチャート全体に膨れあがるブロードな現象を示す部分に対する面積で表示し、ガラス量の比較の材料とした。

表 1 质地性状表

試料 No.	タイプ 分類	粘土鉱物および造岩鉱物										(mm)	ガラス量 (mm)	備考	
		組成分類		Mo-Mn-Hb		Mo-Mn-Ch		Mo-Mi-Hb		Mo-Mi-Ch					
C(16)	Ⅲ	⑥	⑤	④	④	④	④	④	④	④	3	170	19	248	海汰のよい細粒の良質粘土、ガラス量が少ないと いふ。
Mo-①(1)	C(26)	Ⅲ	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	4	157	22	9(6)	4(6)
2(2)	G(27)	I~II	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	4	157	22	9(6)	4(6)
3(3)	F'(26)	Ⅲ	⑮	⑯	⑭	⑫	⑩	⑨	⑧	⑦	3	134	27	17	372
Mo-Ma-①(4)	A(16)	Ⅲ	①	②	④	④	④	④	④	④	4	300(+)	14	20	425
2(5)	A(16)	Ⅲ	①	⑤	⑥	③	④	④	④	④	4	250(+)	16	37	296
3(6)	D(28)	Ⅲ	⑥	⑨	⑩	④	④	④	④	④	5	250(+)	24	490	花崗岩質粘土、粗粒Qtを多量に混入、ガラス量が多い。 粗粒Qt、Ptを混入する程度のそろった粘土、ガラスの 細粒がよい。
4(7)	F'(26)	Ⅲ~IV	⑯	⑮	⑭	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	4	3	200	17	342
5(8)	G(27)	Ⅲ	⑬	⑭	⑩	④	③	③	③	③	4	250(+)	21	14	435
6(9)	F(25)	Ⅲ~IV	⑯	⑮	⑭	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	4	250(+)	36	370	原土の組織をよく残す、ガラス量は少なく溶液が悪い。 M ₁ 、溶液のよい粘土、ガラス化が進んでいる。
Ss-1(10)	G(27)	II~III	⑯	⑮	⑭	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	4	132	56	15	498
2(11)	G(27)	Ⅲ	⑬	⑭	⑩	④	③	③	③	③	3	300(+)	42	528	粗粒Qtを多く混入、粒径のそろった粘土、ガラス化 が進んでいる。
③(12)	F(25)	Ⅲ	⑯	⑮	⑭	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	3	174	47	360	粒径のそろった粘土、ガラス化が進んでいる。
④(13)	G(27)	II~III	⑯	⑮	⑭	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	4	176	14	27	430
5(14)	A(16)	II~III	①	②	⑤	④	⑤	④	⑤	④	7	3	156	32	17
6(15)	G(27)	IV	⑬	⑭	⑩	④	④	④	④	④	3	122	41	450	粒径の比較的そろった粘土、ガラス量は多くなる。 ガラス量が少ないので、粗粒の粒径のそろった粘土、ガラス化が進んでいる。
⑦(16)	D(28)	II~III	⑥	⑦	⑧	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	3	170	46	24	600
8(17)	G(27)	II~III	⑯	⑮	⑭	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	3	110	39	18	405
9(18)	G(27)	Ⅲ	⑯	⑮	⑭	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	4	175	24	415	発達したガラスが生成、粒径の比較的そろった粘土、 粗粒Qt、Pl、Hbを混入、原土の組織を残し、ガラス量 が少ない。
⑩(19)	B(17)	Ⅱ	①	②	③	④	③	④	③	④	5	170	17	8	320
⑪(20)	E(25)F' II~III	⑯	⑮	⑭	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	4	198	32	23	360



第 214 図 三角ダイヤグラム位置分類図

電子顕微鏡観察によって得られたガラス量と X 線回折試験におけるガラス量を比較対比し、さらにムライト (Mu) クリスピーライト (Cr)、などの組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2.1 組成分類

i) Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム

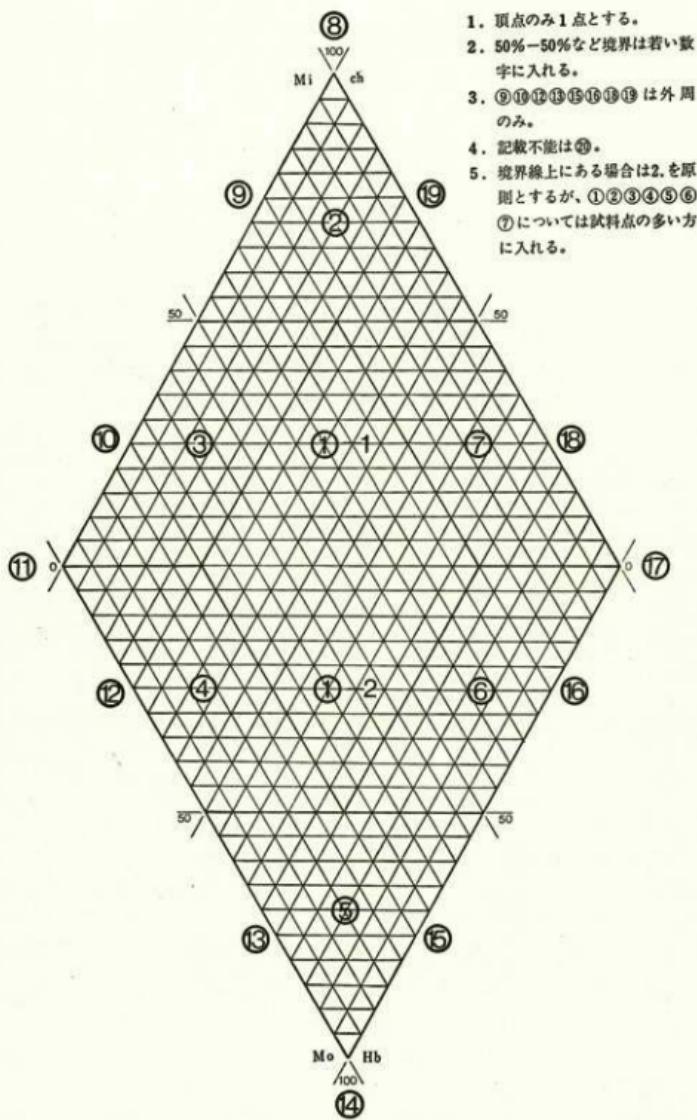
第 214 図に示すように三角ダイヤグラムを①～⑯に分割し、位置分類を各胎土についておこない、各胎土の位置を数字であらわした。

Mo, Mi, Hb の 3 成分の含まれない胎土は記載不能として⑯に含め、別に検討した。

三角ダイヤグラムはモンモリロナイト (Mo)、雲母類 (Mi)、角閃石 (Hb) の X 線回折試験におけるチャートのピーク高を百分率 (%) で表示する。

モンモリロナイト (Mo) は $Mo/Mo+Mi+Hb \times 100$ で百分率として求め、同様に Mi, Hb も計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の①～⑯は Mo, Mi, Hb の 3 成分を含み、各辺は 2 成分、各頂点は 1 成分よりなっていることをあらわしている。



第215図 菱形ダイヤグラム位置分類図

位置分類についての基本原則は第 214 図に示すとおりである。

ii) Mo-Ch, Mi-Hb 菱型ダイヤグラム

第 215 図に示すように菱型ダイヤグラムを①～⑩に分割し、位置分類を数字であらわした。記載不能は⑪として別に検討した。

記載不能はモンモリロナイト (Mo), 雲母類 (Mi), 緑泥石 (Ch), 角閃石 (Hb) のうち、③ 3 成分以上含まれない、⑥ Mo, Ch 2 成分が含まれない、⑩ Mi, Hb の 2 成分が含まれないの 3 例がある。

菱型ダイヤグラムは Mo-Ch, Mi-Hb の組合せを表示するものである。

Mo-Ch, Mi-Hb の各次の X 線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎に百分率であらわすもので、例えば、 $Mo/Mo+Ch \times 100$ と計算し、各組合せ百分率を記載したものである。

菱型ダイヤグラム内にある①～⑦は Mo, Mi, Ch, Hb の 4 成分が含まれ、各辺は Mo, Mi, Ch, Hb のうち 3 成分、各頂点は 2 成分が含まれていることを示す。①-1 と ①-2 は現在のところ大きな意味はないが胎土分析の量が増えてくると位置分類上の区分が必要となるかもしれないが現在は①として一括に取り扱った。

位置分類についての基本原則は第 215 図に示すとおりである。

2.2 焼成ランク

焼成ランクの区分は X 線回折試験による鉱物組成と電子顕微鏡観察によるガラス量によっておこなった。

ムライト (Mu) は磁器など高温で焼かれた状態ではじめて生成する鉱物であり、クリストバライト (Cr) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき X 線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から土器胎土の焼成ランクを I ～ V の 5 段階に区分した。

① 焼成ランク I ……高温を示すムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広い。

⑤ 焼成ランク II ……ムライトとクリストバライトが共存し単位ガラスの面積が狭くなる。

⑥ 焼成ランク III ……ガラスの中にクリストバライトが生成し、ガラスの単位面積が小さく、葉状断面をなし、ガラスのつながりにかける。

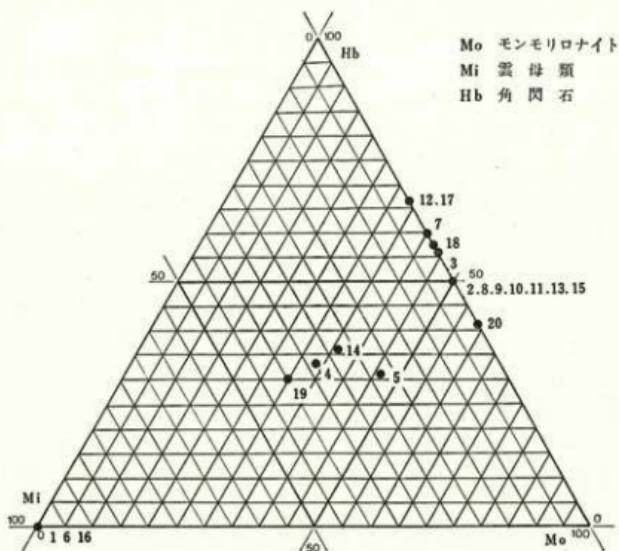
⑦ 焼成ランク IV ……ガラスのみが生成し、原土の組織をかなり明瞭に残す。ガラスは微小な葉状を呈する。

⑧ 焼成ランク V ……原土に近い組織を有し、ガラスがほとんどできていない。

以上の I ～ V の分類は原則であるが胎土の材質すなわち粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバライトなどの組合せと、いくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第 1 表の右端の備考に理由を記した。

2.3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイヤグラム、菱型ダイヤグラムの位置分類による組合せによっておこなった。



第216図 Mo-Mi-Hb 三角ダイグラム

第2表

No.	遺跡名	住居址	遺物No.	器種	部位	備考
1	馬込大原	6	6	小型台付壺	胸	
2	"	4	2	壺	胸	
3	"	5	1	壺	胸	
4	馬込新屋敷	11	—	器	胸	叩き目
5	"	10	7	壺	脚	
6	"	3	1	壺	胸	
7	"	3	7	高小壺	胸	
8	"	3	11	型壺	胸	
9	"	2	4	壺	胸	
10	ささら	16	1	壺	脚	
11	"	16	9	高壺	脚	吉ヶ谷式
12	"	16	10	高壺	口	
13	"	10	—	壺	口	
14	"	8	2	高壺	口	
15	"	8	5	壺	口	
16	"	8	—	高壺	口	
17	"	7	1	壺	口	
18	"	6	1	壺	口	
19	"	5	—	壺	口	
20	"	2	—	壺	口	

同じ組成をもつ土器胎土は位置分類の数字組合せも同じはずである。

タイプ分類は三角ダイヤグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるもので、便宜上アルファベットの大文字を使用し、同じ組合せのものは同じ文字を使用し、表現した。例えば三角ダイヤグラムの①、菱型ダイヤグラムの①-1 の組合せは A、三角ダイヤグラムの②、菱型ダイヤグラムの⑨は B という具合にである。各文字の後の () 内の数字は三角、菱型ダイヤグラムの位置分類の数字を合計したものである。

近い組成を示しながら位置分類上隣接するタイプ分類に入る場合には試料数の多いものの類似として A' などとダッシュを付けて分類した。

なお、タイプの分類の A, B, C 等は便宜上であり、今後試験数の増加とともに統一した分類名称を与える考えである。

3. 実験結果

3.1 タイプ分類

土器胎土は第1表胎土性状表に示すように、第216図三角ダイヤグラム、第217図菱型ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいて A～G の 7 タイプに分類される。

焼成ランクは全体に II～III であり、ガラスの生成が割合に進んでいる。

材質的には粒径のそろった粘土が多く、ガラス生成との関連性がうかがわれる特徴である。

Ma-1～5 は混入する石英の量が多く、他の胎土とは異っている。

A タイプ……Ma-1 (4), 2 (5), Ss-5 (14)

モンモリロナイト (Mo)、雲母類 (Mi)、角閃石 (Hb) の 3 成分よりなり、緑泥石 (Ch) に欠ける。Ma-1, 2 は粗粒の石英、斜長石を多く混入するが基質部は粒径のそろった良質な粘土。Ss-5 は淘汰の悪い粘土で、各胎土ともにガラスの生成が充分ではなく、焼成ランクは III である。

B タイプ……Ss-10 (19)

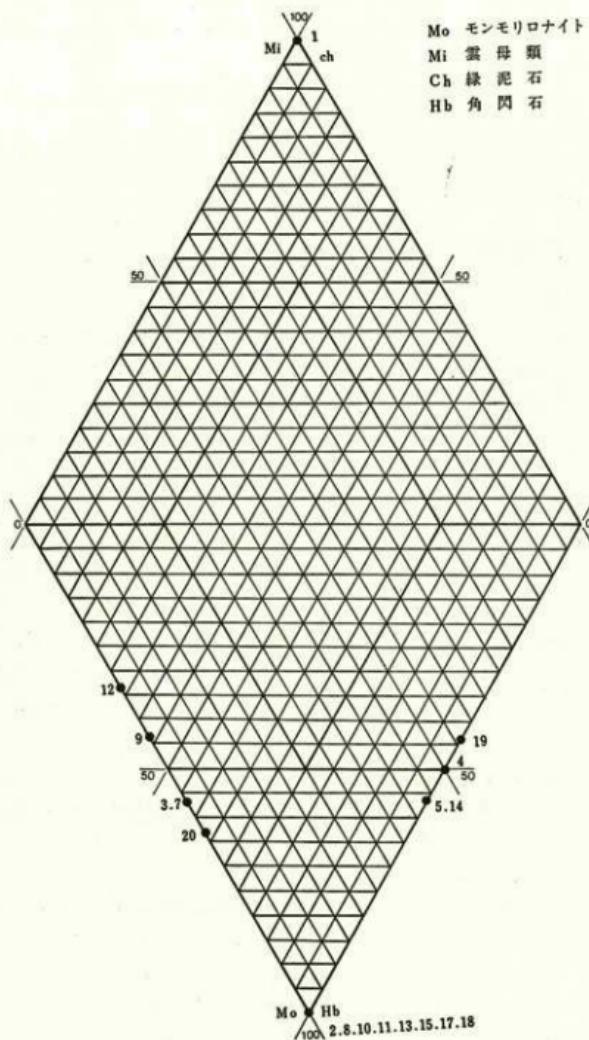
モンモリロナイト (Mo)、雲母類 (Mi)、角閃石 (Hb) の 3 成分よりなり緑泥石 (Ch) に欠ける。組成的には A タイプに近い。ガラスの生成状態が良く緻密化が進んでおり、焼成ランクも II と比較的高い。

C タイプ……Mo-1 (1)

雲母類 (Mi) 緑泥石 (Ch) の 2 成分よりなり、モンモリロナイト (Mo) 角閃石 (Hb) に欠ける。淘汰のよい細粒の良質粘土を素地とし、焼成ランクは III と低くガラス量は少ない。

D タイプ……Ma-3 (6), Ss-7 (16)

雲母類 (Mi) のみ 1 成分よりなり、モンモリロナイト (Mo)、緑泥石 (Ch)、角閃石 (Hb) に欠ける。Ma-3 は花崗岩質の粘土と考えられ、焼成ランクは III と低いがガラスの生成が良好である。クリストバライド (Cr) ができていない状態にありながら、ガラスの生成が良好であるのは素地の良さによるものではないか。Ss-7 は粒径のそろった粘土であるが花崗岩質であるかどうか判別が難しい。組成的には花崗岩質に近いようであるがカオリナイト (Ka)、ハロナイト (Ha) が存在しないし、電子顕微鏡で見る限り、ローム質粘土と判定されることから Ma-3 とは異なるものであ



第 217 図 Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

ろう。焼成ランクはⅡ～Ⅲでガラス化は進んでいる。

Eタイプ……Ss-11 (20)

モンモリロナイト (Mo), 角閃石 (Hb), 緑泥石 (Ch) の3成分よりなり, 雲母類 (Mi) にかける。淘汰の悪い粘土を素地とし, 焼成ランクはⅡ～Ⅲで, ガラスの生成はあまりよくないがクリストバライト (Cr) が多く生成している。本質的にFタイプに近いものであるが三角ダイヤグラムにおける位置分類が異なるため独立させた。

Fタイプ……Mo-3 (3), Ma-4 (7), 6 (9), Ss-3 (12)

モンモリロナイト (Mo), 緑泥石 (Ch), 角閃石 (Hb) の3成分よりなり, 雲母類 (Mi) にかける。菱型ダイヤグラムの中の位置分類では隣接する⑩に入るが組成的にはFタイプに近いのでF'タイプとして Mo-3 (3) Ma-4 (7) も含めた。焼成ランクⅢで, ガラスの量が少なく原土の組成を残している。比較的淘汰の悪い粘土を使用している。

Gタイプ……Mo-2 (2), Ma-5 (8), Ss-1 (10), 2 (11), 4 (13), Ss-6 (15), 8 (17), 9 (18)

モンモリロナイト (Mo), 角閃石 (Hb) の2成分よりなり, 雲母類 (Mi), 緑泥石 (Ch) に欠ける。焼成ランクⅡ～Ⅲであり, 粒径の比較的そろった粘土を素地とし, ガラスの生成も進んでいる。Mo-2 (2) はムライト (Mu), クリストバライト (Cr) が生成し, 他のものより焼成ランクはⅠ～Ⅱと高い。

3.2 まとめ

土器胎土は20試料分析した結果7タイプに分類された。現地の土の分析結果がないので在地性についての検討は難しいが, 最も多いものとしてGタイプがあり, 在地性としての可能性は最も高い。また, A, Fタイプも比較的多くあり, Gタイプとは土の採取層準を異にしたとすれば在地性の可能性は充分にあると推察される。

これらの中で最も特異性のあるものはDタイプのMa-3 (6) である。この土器胎土は花崗岩質粘土を素地としている可能性が高く, 他のローム質粘土とは材質的に大きな差がある。

Bタイプはガラスの生成が進み緻密化しており, Aタイプに近い組成ではあるが, いくぶん異なる器質を有している。

各タイプに分類された土器胎土は鉱物組成, ガラスの生成状態, 粘土の良悪と各々個性があり, 共通性には欠ける点が多くりられることから判断して, 7タイプは各々独自のものと推察される。

(井上 嶽)*

写 真 図 版



9・10号土壤



11号土壤



13・14号土壤



15・16・17号土壤



18号土壤



19号土壤



20号土壤



21号土壤

さら遺跡

図版 2



22号土壤



23号土壤



24号土壤



25号土壤



26号土壤



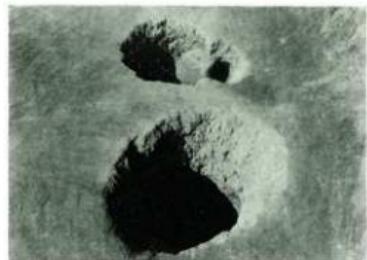
27号土壤



28号土壤



29号土壤



30・31号土壤



32・33・34号土壤



35・36号土壤



35号土壤



37号土壤



38号土壤



1号土壤



1号土壤



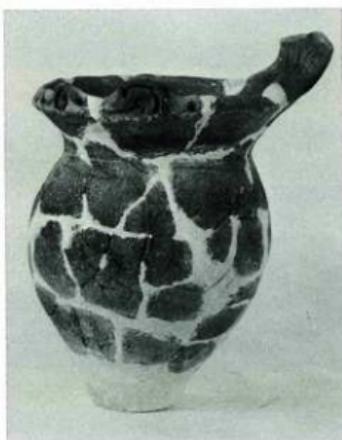
33号土壤出土土器



33号土壤出土土器



33号土壤出土土器



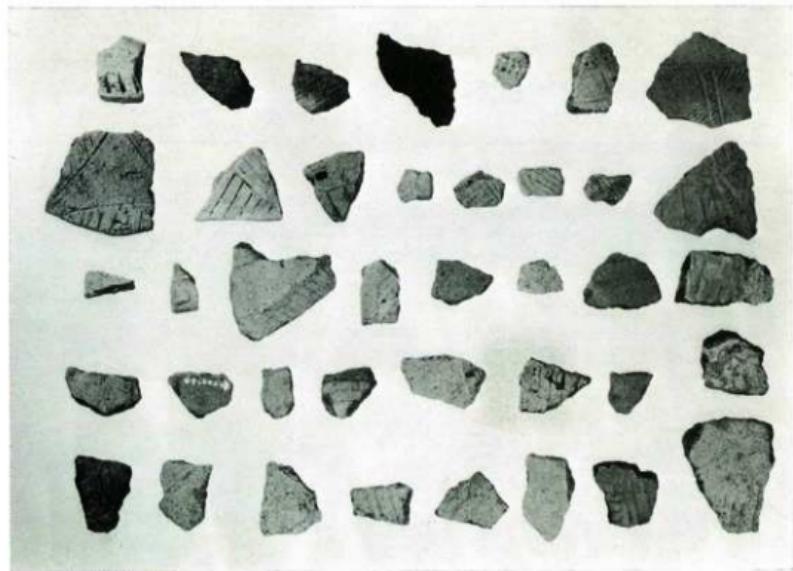
26号土壤出土土器



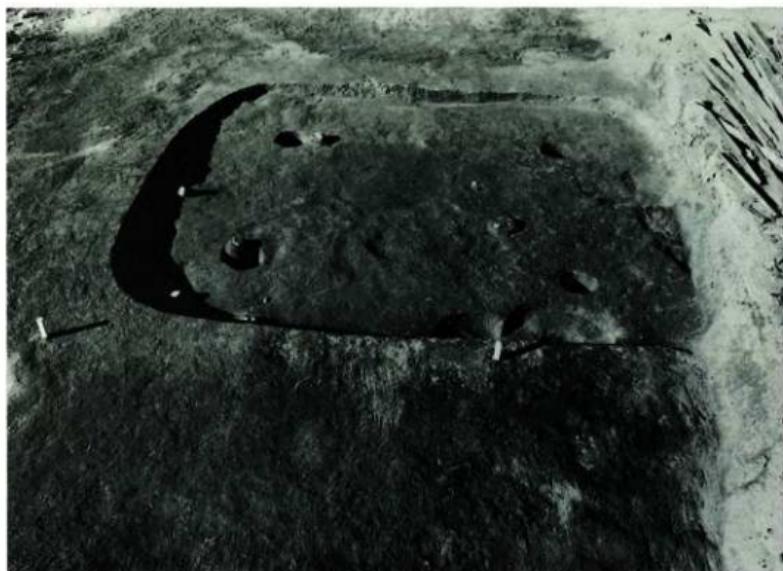
1号埋甕出土土器



IV区集中出土土器



IV区集中出土土器



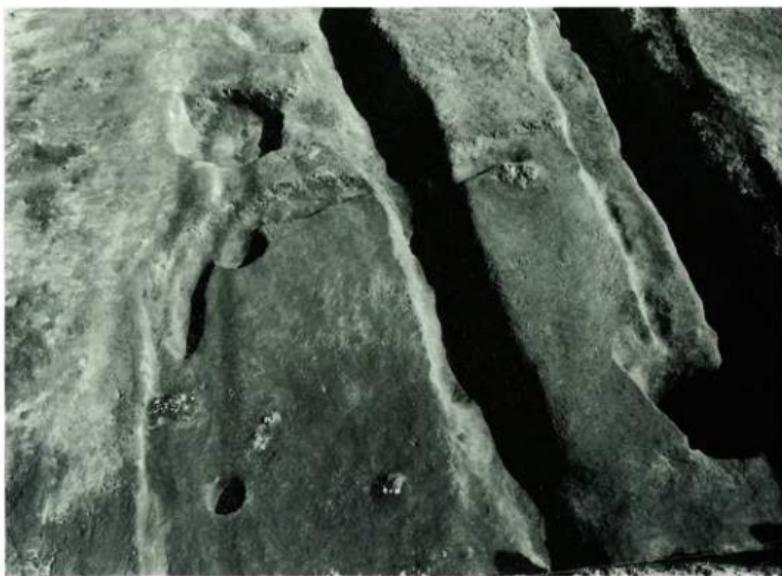
1号住居址



2号住居址

図版 7

ささら遺跡



3号住居址



4号住居址



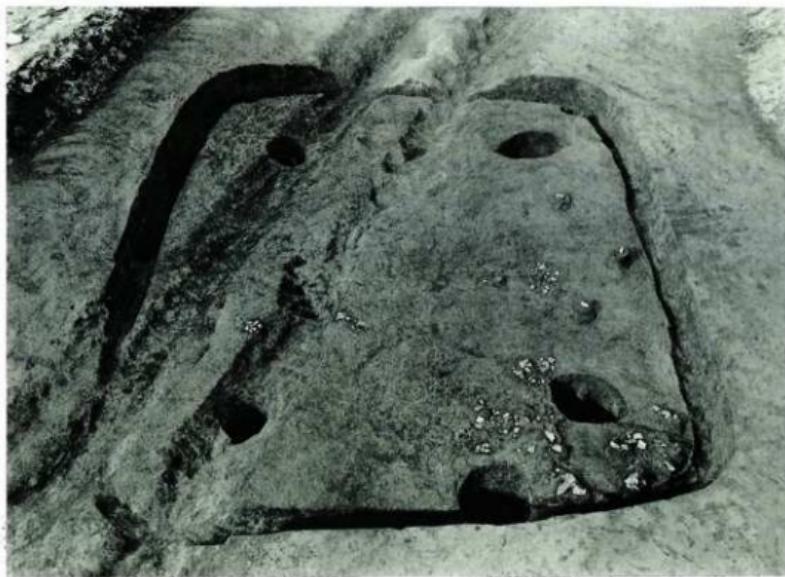
5号住居址



6号住居址



7号住居址



8号住居址



9号住居址



10号住居址



11号住居址



12号住居址

さら遺跡

図版12



13号住居址



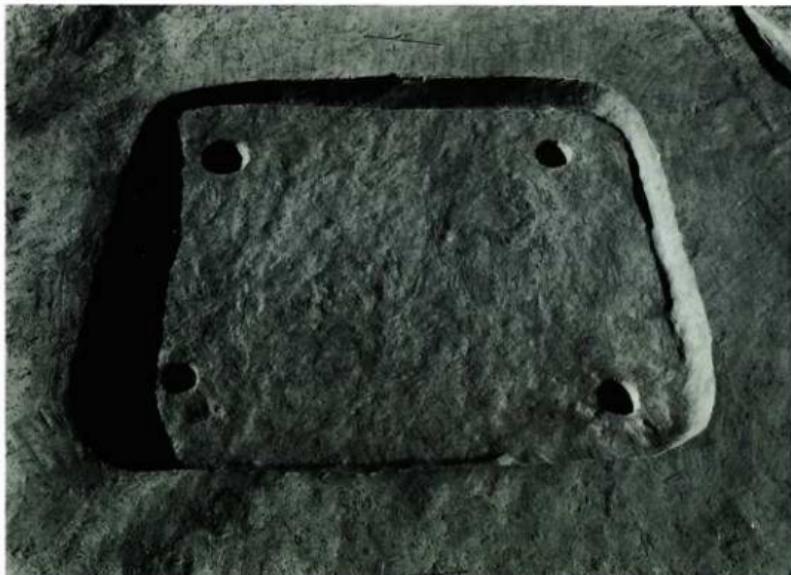
14号住居址

図版13

さら遺跡



15号住居址



16号住居址



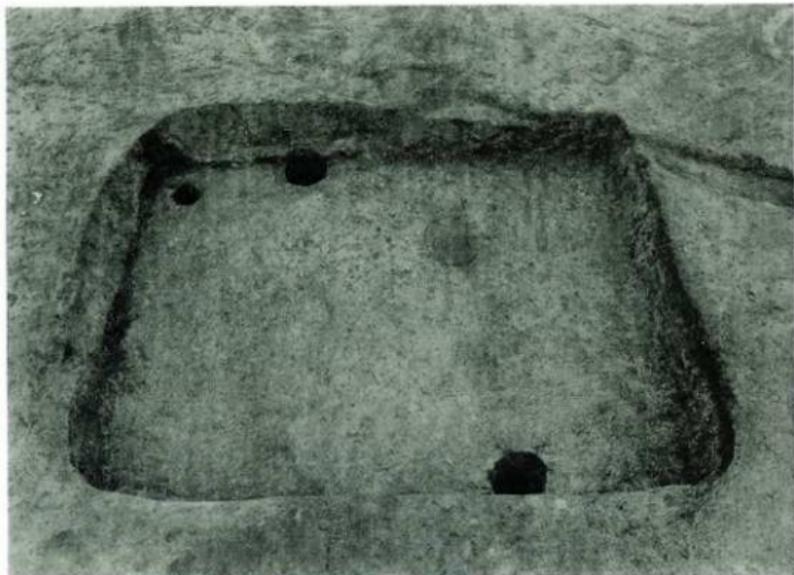
17号住居址



18号住居址

図版15

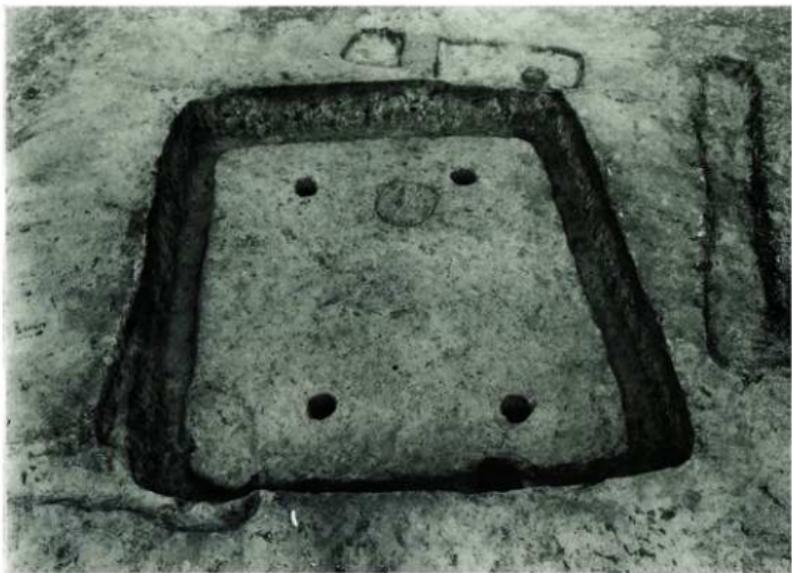
さら遺跡



19号住居址



20号住居址



21号住居址



21号住居址遺物出土状態



掘立柱建物址



1号住居址出土土器



2号住居址出土土器



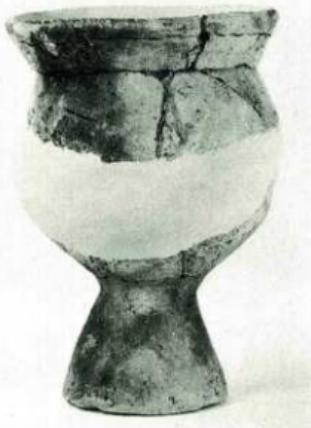
3号住居址出土土器



7号住居址出土土器



8号住居址出土土器



9号住居址出土土器



13号住居址出土土器



13号住居址出土土器



13号住居址出土土器



13号住居址出土土器



13号住居址出土土器



15号住居址出土土器



15号住居址出土土器



16号住居址出土土器



16号住居址出土土器



16号住居址出土土器



18号住居址出土土器



19号住居址出土土器



21号住居址出土土器



21号住居址出土土器



21号住居址出土土器



21号住居址出土土器



21号住居址出土土器



21号住居址出土土器



21号住居址出土土器



21号住居址出土土器



21号住居址出土土器

ささら遺跡

図版22



Ⅳ区全景



1号墳全景



1号墳内部主体



1号墳内部主体遺物出土状態